

大学礼拝 説教集

第 21 号



2017

東北学院大学

田中忠雄「弟子の足を洗う」

色紙(27 x 24cm)に水彩、左下にサイン「Tanaka T. 押印「忠」。裏に「弟子の足を洗う」「田中忠雄」との墨書あり。これも画家本人の手によるものだろう。

本学に所蔵される経緯は不明であるが、一九八八年の泉キャンパスのステンドグラスの制作時に由来するかと推測される。

ヨハネによる福音書の第十三章に記された主イエスが弟子たちの足を洗った場面を描いている。ペテロの番になって、ペテロが「足だけでなく、手も頭も洗って下さい」と言っているところであろう。この主題はビザンティンのモザイクから作例がある(十一世紀ギリシアのデルフォイ近郊のホシオス・ルカス修道院聖堂)。

描いた田中忠雄(1903-95)は、和田三造(1883-1967)、小磯良平(1903-88)と並んで近代日本を代表するキリスト教主題の画家のひとり。その父、田中兎毛(1864-1934)は、和泉(大阪府)の岸和田の出身。岸和田藩主の岡部長職(1855-1925)は、明治の近代化に際して洗礼を受けたふたりの藩主のうちのひとりで、もうひとりは兵庫三田藩主の九鬼隆義(1837-91)であった(三田のキリスト教からは白洲退蔵がでる。その孫が白洲次郎)。岡部長職は新島襄と澤山保羅に岸和田伝道を依頼し(岸和田はまた日本近代最初の伝道師のひとり聖公会のチャニング・ムーア・ウイリアムズが晩年好んだ地でもあった)、家老の山岡伊方を筆頭に多くの信者がでた。田中兎毛もそのひとりで、同志社に学ぶが、中退して仙台の東華学校の教師となった。その後札幌の組合基督教会の初代牧師として活動中に田中忠雄は出生した。その後の一九一四年に父田中兎毛は神戸女子神学校に赴任し、一九二〇年に忠雄も兵庫教会で父から受洗した。神戸では三田藩が出自の小磯良平と交友する。田中忠雄がキリスト教主題の作品を描くのは戦後間もなくからといい、中世初期の素朴で力強いロマネスクの壁画に影響を受けたともいう。白樺派の表現主義者たちが好んだジョルジュ・ルオー流の表現力のある線の特徴とし、単純な形と強いコントラストで本学の泉キャンパスの礼拝堂のステンドグラスも制作している。父の兎毛との繋がりもあり、本学院とは縁が深い。

(大学宗教主任 鐸木道剛)

大学礼拝

説教集

第 2 1 号

2017

東北学院大学

目次

巻頭言	野村 信	4
千年も一時	松本 宣郎	6
マリアの賛歌（マグニフィカート）	佐々木 哲夫	12
魂の渇きを癒してくださいさるキリスト	望 月 修	19
安息日のレボリューション	橋 爪 忠 夫	24
御言葉ですから	宮 川 経 宣	29
命の価値	中 本 純	41
わたしのもとに来なさい	関 川 祐 一 郎	47
新しい掟	松 井 浩 樹	53
神の愛を受け取る者として	西 間 木 順	58
実りある人生を送るために	野 村 信	64
光にあゆめよ	阿 久 戸 義 愛	69
オー・ハッピー・デイ！	北 博	74
宗 教 部 長	野 村 信	4
理 事 長 ・ 学 長	松 本 宣 郎	6
院 長	佐 々 木 哲 夫	12
仙 台 広 瀬 河 畔 教 会	望 月 修	19
宮 城 野 愛 泉 教 会	橋 爪 忠 夫	24
仙 台 五 橋 教 会	宮 川 経 宣	29
仙 台 東 六 番 丁 教 会	中 本 純	41
石 巻 山 城 町 教 会	関 川 祐 一 郎	47
東 北 学 院 中 学 校 ・ 高 等 学 校 宗 教 主 任	松 井 浩 樹	53
東 北 学 院 榴 ヶ 岡 高 等 学 校 宗 教 主 任	西 間 木 順	58
宗 教 部 長	野 村 信	64
大 学 宗 教 主 任	阿 久 戸 義 愛	69
大 学 宗 教 主 任	北 博	74

サンタクローズのプレゼント	大学宗教主任	鐸木道剛	80
サマリア人、マジパネエ!	大学宗教主任	原田浩司	85
私が暁の翼を駆って、海の果てに住んでも	大学宗教主任	藤原佐和子	92
命の水	大学宗教主任	吉田新	99
キリストの体として互いに豊かに生きる	総合人文学科長	出村みや子	104
ぶどうの木とその枝のように	経済学部教授	松村尚彦	111
誠の感謝と願い	法学部教授	横田尚昌	116
讚美歌	工学部教授	星宮務	121
サレプタのやもめ	工学部准教授	長島慎二	128
ある日の音楽礼拝	大学オルガニスト	今井奈緒子	133
人生を変える秘訣	教養学部准教授	大澤史伸	139
一粒の麦として生きた青年	東北学院史資料センター	日野哲	145
編集後記	大学宗教主任	吉田新	151

巻頭言 二つの出発

宗 教 部 長 野 村 信

1 主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。」

(創世記第二二章一節)

四月の初旬。戸惑いながら歩く新入生たちが初々しい。サークルへの勧誘がにぎやかになる。三つのキャンパスの、それぞれの桜のつぼみがはじける時を待っている。こうして、また新しい一巡りの時がやってきた。

私たちは、いつも新たに始める。一見、それは四季というすでに私たちが生まれる前からあった時の移り変わりの中で進行しているようにも見える。ならば、それは単調で、規則的な繰り返しでもある。しかし、自覚的に新しい年を始めたい。新しい年を意欲的に過ごし、単に時間の流れの中

に身を任せるのではなく、自分から新しく始めたい。

私たちの人生は、振り返ってみると、なるほど、いつも自覚的に「始める」ということをしてきた。サークル活動をしたことのある人は、不安や問題があったけれども、それを克服して前進してきたという手ごたえを持っている。アルバイトをしたことのある人は、やればなんとかなるといいう経験を積んでいいる。よく勉強をしてきた人たちは、毎日こつこつと始めることが大切であると知っている。とにかく始める。人間は「始める動物」だから、自分から積極的に始める。そして、生涯「始める」といいう人生を送る。そう、大学生活を始める。一人暮らしを始める。会社に入って仕事を始める。さらに結婚生活を始める。子育てを始める。老後を始める。そして死の向こうにある新しい世界の生活を始める。いつも自覚的に始める。

おおよそ、終わりを恐れず、終わることですべてが失せるという思いを克服できる姿勢はただ一つ、自分から始めるということである。そして、聖書が繰り返し私たちに教えていることは、私たちは自覚的に始めることの出来る人間であり、神御自身が始めるお方であったのである。

聖書はそのことを信仰の原点、アブラムの最初の出発として描く。

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。(四節)

千年も一時

理事長・学長 松本宣郎

詩編 九〇編一〜六節

1 【祈り。神の人モーセの詩。】

主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。

2 山々が生まれる前から

大地が、人の世が、生み出される前から

世々とこしえに、あなたは神。

3 あなたは人を塵に返し

「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

4 千年といえども御目には

昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。

5 あなたは眠りの中に人を漂わせ

朝あさが来くれば、人ひとは草くさのように移うつります。

6 朝あさが来くれば花はなを咲さかせ、やがて移うつる。

夕ゆふべにはしおれ、枯かれて行いきます。

マタイによる福音書 第一〇章二六―三二節

26 「人々ひとびとを恐おそれてはならない。覆おおわれているもので現あらわされないものはなく、隠かくされているもので知しられずに済すむものはないからである。27 わたしが暗闇くらやみでああなたがたに言いうことを、明あかるみで言いいなさい。耳打みみうちされたことを、屋根やねの上うへで言いい広ひろめなさい。28 体からだは殺ころしても、魂たましいを殺ころすことのできない者ものどもを恐おそれるな。むしろ、魂たましいも体からだも地獄じごくで滅ほろぼすことのできる方かたを恐おそれなさい。29 二羽ふたはの雀すずめが一アサリオンで売うられているではないか。だが、その一羽ひとはさえ、あなたがたの父ちちのお許ゆるしがなければ、地ちに落おちることはない。30 あなたがたの髪かみの毛けまでも一本ほんのこ残のこらず数かずえられている。31 だから、恐おそれるな。あなたがたは、たくさんの雀すずめよりもはるかにまさっている。」

東北学院が「仙台神学校」として創設されたのは一八八六（明治一九）年のことであります。従って二〇一六年は一三〇周年にあたります。この節目の年、学院は様々な記念の行事を催して、一三〇年を振り返り、学院がこのように長い年月神に守られて歩んでこられたことへの感謝の意を表しました。

その一つに大学の新しい建物、「ホーイ記念館」の竣工という出来事がありました。一三〇周年を企図して建てられたわけではありませんでしたが、東北大学片平校地の一角を購入することが出来て、新しい構想を盛り込んだ建物として二年前に建設に着手し、記念の年に完成にこぎ着けることが出来たのです。この建物には特別の呼称をつけたい、と考えました。そこで学内で名称の公募を行いました。五〇ほどのアイデアが寄せられましたが、私も加わった担当者は、三校祖の一人であるウイリアム・E・ホーイに因んで「ホーイ記念館」とすることで評議一決しました。三校祖の二人、D・B・シュネーダーは旧図書館に、押川方義は8号館5階のホールに、それぞれその名を冠せられています。残されていたホーイが選ばれるのは自然の流れでもありました。

さて、ウイリアム・E・ホーイは一八五八年アメリカのペンシルヴァニアに生まれ、青年期に当時のアメリカに燃え上がっていたキリスト教の海外宣教の奔流のような運動に加わってアジアに向かい、一八八五年たまたま横浜に寄港して、そこで日本、それも仙台を自らの宣教の使命の

地と確信したのでした。その翌年から彼は仙台において押川、数年後に来仙したシュネーダーと共に、東北最初のキリスト教学校の運営に働きました。ホーイの東北学院への思いは強く、熱く、時に押川の方針と対立することもありました。学院のその後の歴史は、彼を抜きにしてはありえなかつたでしょう。盗難にあつた学校の大金のために、持ち金も給与もはたいて、ほとんど独力で弁済したことも忘れてはなりません。

喘息を持病としていたホーイには仙台の気候は合わなかつたのでしよう、病状の悪化で彼は、東北学院の働きに一区切りをつけ、転地療養もかねて中国に渡ります。元氣になつてホーイは洞庭湖地方などで宣教し、成功を収めます。一九二六年病氣が再発してついに帰国を決意、横浜に寄港した後、アメリカに帰ろうとしたのですがかなわず、船中で没したのでした。六九才、人生の大半、身も心も外国伝道に捧げた生涯でした。

今、ホーイの名は私たちに記憶され、墓はシュネーダー、押川らと共に北山キリスト教墓地に残されています。けれど、東北学院と関わり、日本と中国の伝道にかけた年月、ホーイには苦難のみ多い半生であつたでしょう。しかもその年月は東北学院一三〇年の歴史のごく一部にすぎない長さでありました。

人の働きにはこういう性質、というか限界があるものだ、と思わされます。ホーイだけではあ

りません。東北学院に関わり、あるいは学生、生徒として、あるいは職員、教師として籍を置いた者は二〇万人を超えるでしょう。しかし誰一人として、一三〇年関わり続けた者はいません。

「詩編」は、主が、この世界の初めから今に至るまで、すべてを計らいのうちに置かれる神であり、わたしたち全人類が主に宿り、そこから生まれ、そこに帰って行く、と言います。人間には想像も出来ないほどの時間を神は支配されておられる。しかもわたしたち一人一人がすべて漏れることなく、その時間の中に受けとめられ、神によって覚えられている、ということでしょう。神の時間と人間のはかないほどに短い時間のこの壮大な懸隔、それを詩編は「千年といえども」神にとっては「昨日が今日へと移る夜の一時にすぎ」ない、と見事な比喩で歌うのです。

わたしたちにとって東北学院の一三〇年は、とても長い時間と言つてよいと思います。これだけ長い年月、学院が存続し、教育機関として健全に働いて来られたことに喜び、あるいは誇りに思うこともできるでしょう。しかし、その一三〇年はすべて神の慈しみ、憐れみのひとときのうちにあるのだ、ということをもまたわたしたちは詩編から知らされるのです。その、「神のひととき、あるいは一瞬」である東北学院の一三〇年が神に守られており、そこに関わった、そして現に今関わっている者すべてが神の計画の中にしっかりと置かれ、神はそのことをご存じであることに改めて感謝し、そうである以上、やはりその「神のひととき」に加えられるであろう、東北学院の

これからの五〇年、一〇〇年もまた神に安んじてゆだねてよいことを確信したい、と思うものです。

祈り…父なる神、あなたの目にはほんの一瞬である、一三〇年の、しかしわたしたちにとって
は長い年月、東北学院の歩みにお与えくださったはかりしれない慈しみとお恵みに感謝
いたします。その中で、ホーイ、押川、シュネーダーを始めとする多くの人々に力を与え、
聖霊を注いでよき働きをさせてくださったことを感謝いたします。そしてさらにこれ
からの、あなたの目にはひとときの数十年、百年を東北学院にお与えくださり、これま
でと同じように慈しんでくださいますように。主の御名によってお祈りいたします。

アーメン

マリアの賛歌（マダニフィカート）

院長 佐々木 哲夫

ルカによる福音書 一章四六～五六節

46 そこで、マリアは言った。

47 「わたしの魂は主をあがめ、

わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

48 身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。

49 今から後、いつの世の人ともわたしを幸いな者と言うでしょう、

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、

50 その憐れみは代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます。

51 主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、

52 権力ある者とその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、

53 飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。

54 その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、

55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

56 マリアは、三ヶ月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。

本日の聖書は、「わたしの魂は主をあがめる」で始まっています。この箇所は、宗教改革以前より「聖母マリアのカンテイクム」と呼ばれ、晩の祈りの時にグレゴリア聖歌の旋律に従って朗読されてきました。特に、ラテン語訳聖書の最初の言葉 Magnificat (あがめる) に因んで「マグニフィカート」と呼ばれています。宗教改革者ルターは、一五二一年に「マグニフィカートのドイツ語訳と講解」という結構長い文書を書いており、またルター派の作曲家ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、一七二三年に、この箇所をテキストにオラトリオ「マグニフィカート」を作曲し、今日においてもクリスマススの時期に演奏されています。本日は「マグニフィカート」をテキストにして

礼拝の時を守りたいと思います。

☆

天使ガブリエルの受胎告知を受けた後、エリサベトを訪問したマリアは、言います。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」(四六〜四七節) この表現は、典型的なヘブル詩の形式、同じ意味を重ねる表現になっています。すなわち、「わたしの魂」と「わたしの霊」、「主」と「救い主である神」、「あがめる」と「喜びたたえる」が対応しています。

マリアは、「わたしの魂」「わたしの霊」と表現します。人間を、肉体と精神と魂に分離させる考え方があります。現世に存在する私たちは、肉体も心も魂も丸ごと一つになっての存在ですので、ことさら、分離させる必要がないことは承知しています。とはいえ、「私」ではなく「わたしの魂」「わたしの霊」という表現、また「主を偉大なものとする」「救い主である神を喜ぶ」という表現に、全身全霊を持って神を賛美しているマリアの信仰姿勢を読み取ることが出来ます。その姿勢は「身分の低い、この主のはしため」と徹底的な謙遜の表現を自分に用いていることから読み取れます。「身分の低い、この主のはしため」の直訳は「貧しいもの、虐げられているもの」「女性の奴隷、女性のしもべ」です。文全体が、マリアの謙遜な信仰を浮き彫りにしています

サムエルの母ハンナの祈りを参照したいと思います。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧く

ださい。はしたために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。」(サム上1・11) 比較の意図はありませんが、マリアの謙虚な信仰姿勢は特徴的です。

謙遜であることを誇って「身分の低い、この主のはしたため」の表現をマリアが用いたという批判に対し、宗教改革者ルターは、「神のまえで、人が誇らねばならないことは、無価値な私たちに与えて下さった神の純粋な善と恵みのみである。人は真に謙遜であるときほど、謙遜について知る事は少ない」と解説しています。後者の「人は真に謙遜であるときほど、謙遜について知る事は少ない」について、ルターはさらに説明しています。「高いものに目を留めたからといって、人々が高慢になるものでないように、人々に謙遜であるように教えても、それは無益である。人が取り除かなくてはならないのは、高いとか低いとかといった対象物ではなく目である。心と精神を変えなければならぬ。本当に謙遜であるならば、自分自身では決して自らの謙遜さに気づく事はない」と論じています。すなわち、マリアの謙遜は、真の謙遜さであると論じています。

☆

さて、マリアの言葉は、「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」(五〇節)を境に変わります。前半部の四六節から四九節のいずれの節にも「わたしの」「わたしに」「わた

しを」というように一人称表現が登場していますが、五〇節からは、三人称すなわち「主が」という表現が前面に出てきます。例えば、「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」（五〇節）のように、主と主を畏れる者との関係に視点が移っています。表現内容が、一気に時間と空間を超越する広がりを見せています。その広がりや延長に、今日の日本の主を畏れる者がいることを願うのですが、それはそれとして、ここで主語が「神の憐れみ」になっていることに注目したいのです。イエス・キリストの誕生の出来事が神の憐れみの実現であるというのです。

ところで、「主は憐れみをお忘れになりません、わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに」（五四～五五節）の言葉を聞くと、ユダヤの人々ほどのような連想をするか考えてみました。

「憐れみ」は、旧約聖書では「慈しみ」に相当します。すぐに連想できるのは、旧約の婦人ルツです。ルツが姑に示した態度は慈しみと表現されています。そのルツにボアズが示した態度も慈しみと表現されています。また、ルツとナオミとボアズの三人の出会いは、神から人への慈しみでした。ルツの物語は、まさに、「権力ある者をその座から引き降ろし」「身分の低い者を高く上げ」「飢えた人を良い物で満たす」物語です。

ルツの系図は象徴的です。ボアズとルツからオベドが生まれ、オベドはエッサイの父になりま

す。マタイ一章のイエス・キリストに至る系図には、エッサイは、ダビデ王を設け、イエス・キリストに繋がっていることが記されています。主は、アブラハムからイエス・キリストに至るまで、またその子孫に対してとこしえに憐れみをお忘れにならないというのです。実に、マリアの告白は、イエス・キリストの誕生が、神の憐れみ、慈しみの実現であることを証言しています。

さて、今日の私たちにとって、「思い上がる者を打ち散らし」「権力ある者をその座から引き降ろし」「身分の低い者を高く上げ」「飢えた人を良い物で満たす」という景色は、他でもない神の国の情景であるといえます。マリアは、イエス・キリストの到来によつて神の国が実現されることを、神の偉大さの具体的描写として表現し、主を喜びたたえているのです。マリアのマグニフィカートは、ルターが「神の行為とかえりみは低いところに向かい、人間の目と行為は、高いところのみ向かう。これがマリアの賛歌の動機である」と要約しているように、実に貧しいおとめの深い豊かな信仰内容を表現しているものです。

☆

詩編一〇三編においてダビデは、

わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞつて聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け、長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください。

と主を賛美しています。詩編には、感謝 信頼 嘆き 願いなどさまざまな信仰表現が記されています。賛美も信仰表現の一つです。私たちも、ダビデやマリアとともに主を賛美する心を持つ者でありたいと願います。

魂の渇きを癒してくださいさるキリスト

仙台広瀬河畔教会 望月修

ヨハネによる福音書 第四章一三―一五節

13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

水分を補給することは、生命維持に、必要なことです。暑くなれば、喉の渇きも、早くなります。しかも、水分は、繰り返し補給する必要があります。

先ほど読みました、聖書の個所は、パレスチナの大地、シカルというサマリアの町でのことでした。容赦なく太陽が照りつけています。乾燥し切った土地……。暑さがピークに達する昼時で

した。ガリラヤへの途上、この町に立ち寄られた、主イエスは、旅の疲れを癒すために、井戸の傍らに来て座っておられました。すると、一人の女性が、水を汲みにやって来たのです。

この地域では、井戸の水を汲む時間帯は、朝夕であり、だいたい決まっています。わざわざ暑い日中に、女性独りで、水を汲みに来るのは尋常ではありません。

女性が、訳ありであることは、あとで明らかとなりますが（四・一六一―一八）、離婚を繰り返していました。子供もいません。現在、同棲中の男性とは、結婚をしていません。当時であれば、人目を忍ぶ身でした。わざわざ、人気のない、暑い日中を選んで、井戸にやって来たのです。

彼女は、人生に疲れ切っていました。しかし、生きながらえるための水は必要でした。その井戸の傍らで、偶然とも思える仕方、主イエスと出会ったのです。いつもは、なかったことでした。水を汲み終えれば、また、もと来た道を、気だるさを抱えたまま、帰って行くだけでした。

気まずい思いをしている彼女に、主イエスの方から声を掛けます。「水を飲ませてください」（七）と。彼女は驚き戸惑いますが、不意打ちをくらったような、主イエスの方からの歩み寄りによって、やり取りが始まりました。そして、主イエスは、この女性に向かって言われたのであります。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わ

たしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

主イエスの言葉は、新鮮でした。いや、新鮮だけでなく、実は、誰もが求めているものを、主イエスは、このところで、明らかになさったのであります。

女性は、尋ねます。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」。飢え渴いていたのは、この女性の方でした。そして、この私たちであるのです。

生命の維持に、確かに、水は不可欠です。しかし、それと同じくらい、私たちの魂は、実は、飢え渴いています。主イエスは、そのことに気づかさせてくださいます。そのことに気づかされるまで、つまり、主イエスと出会うまでは、私たちは、魂の飢え渴きを、この地上のもので、満たそうとするでありましょう。より豊かな生活を、と言いながら、しかし、誰もが、「この水を飲む者はだれでもまた渴く」ようなことに、抛り所を置いて生きているのではないのでしょうか。

しかも、私たちの欲望には、際限がありません。これを満たすことができれば、今度は、これを、という具合にです。見た目には、満たされた生活をしているように見えても、実際には、満たされない気持ちのままです。そこには、本当の安心もなければ、平安もありません。

「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」。

本当は、誰もが、このような「水」を、慕い求めているのです。

主イエスは、仰せになります。「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」。

どのようにしたら、このような「水」、決して渴かず、むしろ、その人に、真の潤いを与え、命を育む、そのような「水」を、私たちは飲むことができるでしょうか。

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」(ヨハネ七・三七)。こののち、主イエスは、そのようにも、仰せになります。そうです。主イエス・キリスト御自身です。主イエス・キリスト御自身が、私たちを癒され、私たちの魂の渴きを、本当に癒すことが、おできになるのです。それは、主イエスに救われることです。主イエスに救っていただいて、本来の自分自身を取り戻すことです。それまでは、潤いのない、荒んだ、あり方しかできません。決して満足することのない欲望に、振り回された、人生を歩む他ないのです。少なくとも、魂の渴きを癒すことはできないのです。

蒸し暑さを凌ぐには、適量な水分、そして、爽やかな風が必要でしょう。「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」。主イエスの言葉、そして、主イエス・キリスト御自身こそ、実は、私たちにとっての、そのような水、そして、本当の意味での、爽やかな風であり続けます。

父なる神。

学業や業務の合間に、あなたの御前に集い、あなたの言葉に耳を傾ける時を与えてください、幸いに思います。私たち人間は、この世の言葉や情報、ましてや肉の糧によってのみ生きる存在ではありません。あなたに導かれ養われて始めて人間として生きることができません。あなたの言葉に、私たちは御子による救いがあることを信じていることができます。その恵みを覚えつつ、ここでの営みを続けて行くことができますように、助けてください。

この祈りを、私たちの主イエス・キリストの御名によって、祈ります。アーメン

安息日のレボリユーション

宮城野愛泉教会 橋 爪 忠 夫

マルコによる福音書 第三章一―六節

1 イエスはまた会堂かいどうにお入りはいになった。そこに片手かたての萎えた人ひとがいた。2 人々ひとびとはイエスを訴えうったようと思つて、安息日あんそくびにこの人の病氣びやうきをいやされるかどうか、注目ちゆうもくしていた。3 イエスは手ての萎えた人ひとに、「真ん中まなかに立ちなさい」と言いわれた。4 そして人々ひとびとにこう言いわれた。「安息日あんそくびに律法りつぽうで許ゆるされているのは、善ぜんを行おこなうことか、悪あくを行おこなうことか、命いのちを救すくうことか、殺すころことか。」彼らかれは黙だまっていた。5 そこで、イエスは怒いかつて人々ひとびとを見回みまわし、彼らかれのかたくなな心こころを悲かなしみながら、その人ひとに「手てを伸のばしなさい」と言いわれた。伸のばすと、手ては元もとどおりになった。6 ファリサイ派はの人々ひとびとは出でて行き、早速さうそく、ヘロデ派はの人々ひとびとと一緒にいっしょに、どのようにしてイエスを殺ころそうかと相談そうだんし始はめた。

皆さんは人の集まる場所に入るときに、その場の雰囲気にならないでしょうか。一會衆としてその場に臨むならば、その場に少しずつなじんで行けばよいでしょうが、その場で人の前に立つとなった場合には、いつそう、場の空気が気になります。特に私たち日本人は、その場の空気が雰囲気敏感だと言われています。そういうところから、この聖書箇所「イエスはまた会堂―つまり安息日に人の集まる所―にお入りになった」（一節）とありますので、まず第一に、その場の雰囲気がどうであったかと想像してみたいと思います。それはひと言で言えば、あまりよいものではありませんでした。二節にあるように、「人々はイエスを訴えようと思つて、安息日にこの人―一節の片手の萎えた人―の病気をいやされるかどうか、注目していた」。ですから、単に「注目していた」のではなく、訴える口実を見つけようと、それこそ虎視眈々とうかがっていたのでしよう。そういう下心をいだいた複数の人のかもし出す険しい雰囲気があつたに違いありません。普通に考えるならば、手の萎えた不自由な人がいやされるかどうかを注目するのには、信じられないほど異常な雰囲気です。いやす行為が犯罪と見なされ、告訴の対象となるとは、理解したいと思われるかもしれません。それを理解するためには、ユダヤ人にとって「安息日」というものがどんなものであつたかを知る必要があります。安息日とはモーセを通して神から与えられた有名な十戒の第四番目、「安息日を心に留め、これを聖別せよ」（出エジプト記二〇章八節）に

由来します。そこには「七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。……六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」（同上10、11節）とその理由が加えられています。しかしその後のイエスの当時のユダヤ人の安息日の守り方はその雰囲気も様相も、だいぶ違ったものになっていました。それに対して主イエスは挑戦的で当時の人々にとっては革命に近いものに写ったのではないでしょうか。

当時のユダヤ人が安息日に命懸けで厳格に守ろうとしたのには、彼らの国イスラエルがたどった歴史が深く関係します。彼らの国・民族は度重なる危機を経験し、さらに国が滅びる経験をしました。紀元前六世紀の約五十年間は大帝國バビロニアによって、国を根こそぎにされる捕囚を経験しました。民族の多くがバビロンに捕え移され、一方でエルサムには異民族を移植して、イスラエルと名のつくあらゆるものが歴史から消されそうになりました。財産はもちろんのこと、あらゆるものを失ったイスラエルが、それでもなお生き残ったのは、彼らに目で見えて読むだけではなく、心に記して覚える律法（旧約聖書）があつたからです。国土を離れたユダヤ人にも律法が民族の絆を保ちました。中でも安息日を守るといふ律法はどこでも可能な民族の一体を保つ

抛り所となり、それを厳格に守ることがその後、益々強調されるようになりました。時代を下ってイエスの時代になると、安息日を守るための三九ヶ条が成立し、さらにユダヤの指導者（ラビ）たちによって成文の禁止律が加わっていました。その一例をあげれば、この日には約一キロメートル以上の歩行の禁止、火を起すことの禁止、二文字書くことの禁止などです。いずれもそれらは労働と見なされたからです。さらには、安息日には死に瀕している場合を除いて、人をいやすことも禁じられ、掟を犯すものとして罰が下るという次第でした。どこか安息日の最も大切な安らぎそのものが失われた観がありました。さらに問題なのは、禁止条項を厳しく守るという条件を満して、はじめて安息日の安息を得られるということでした。律法主義の密林のように繁茂する束縛が、安息日本来の安息というオアシスを隠してしまっていました。

このようなユダヤの人々の安息の重んじ方に対して、主イエスは挑戦的です。三節にあるように彼は「手の萎えた人に」敢えて人々に最も目立つ「真ん中に立ちなさい」と命じられた。そして人々を見回して、安息日の真の意味を問直すような、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」（四節）と問いを発し、さらに人々の押し黙った反応を見るや、「怒り」と「人々のかたくなな心と悲しみ」ながら、その人に、「手

を伸ばしなさい」(五節)と命じて、生死にかかわらず日延べすべきいやしを敢えて決行されたのです。これは当時厳守していた安息日の掟を根本から打ち破る革命、レボリューションでした。どうして主イエスは安息日について、これほど革命的だったのでしょうか。その鍵は二章二八節にある「人の子(イエス)は安息日の主でもある」からです。主イエスは本当の安息日の安息を回復し、人に本当の安息を与えるためにこの世に神から遣わされたからです。不思議にも福音書を見ると、主イエスによって安息日に様々な病の人々を敢えていやしています。主は安息日の主なのです。人が努力して得ようとして得られるのが本当の安息ではない。真の安息は主イエスのいやし、しかも主イエスのみ業によって与えられるのだということです。

主よ、あなたの安息に向けて造られたわたしたちに、主イエスによってまことの安息に安らうことができるようにしてください。

御言葉ですから

仙台五橋教会 宮川 経宣

ルカによる福音書 五章一〜一二節

「イエスがゲネサレト湖畔に立つておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。 2 イエスは、二そこの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。 3 そこでイエスは、そのうちの二そこの一そこのシモンを持ち、舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。 4 話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。 5 シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。 6 そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。 7 そこで、もう二そこの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくるように頼んだ。彼らは来て、二そこの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。 8 これを見たシ

モン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。⁹ とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。¹⁰ シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」¹¹ そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

初めに、ルカ福音書5章4〜6節「4話し終わつたとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。5シモンは、『先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう』と答えた。6そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。」とあります。ここは皆さんがよく御存じのシモン・ペトロが漁師から主イエスから「今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」との言葉をかけられ、漁師シモン・ペトロが主イエスの弟子となつていく有名な物語です。そしてシモン・ペトロが漁師として働いていた所が、ゲネサレト湖畔で、この湖は、ガリラヤ湖とも言われ、その形は西洋梨のようで、長さは二〇キロ、幅は十三キロで海面

から二百メートル低いくぼ地で多くの魚がいる場所であると言われています。

さて、そのような湖のほとりで何故主イエスはおられたのでしょうか、それは1節に「イエスがゲネサレト湖畔に立つておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。」と記されるように、主イエスの名声が上がり、今や町々村々と主イエスが行かれるところに人々が大勢集まり、その主イエスの口を通して語られる新鮮にして権威ある教えに耳を傾けるようになりました。そして主イエスは、その群衆から離れて休息するために、このゲネサレト湖畔に来られたのですが、そこにも大勢の人々が四方八方から追いかけてきたと見ることが出来ません。

そこで主イエスは、岸边に上げてあった二艘の舟のうち、シモン・ペトロの舟に乗り、岸から少し離れたところから岸边に集まっている大勢の群衆に神の国の教えを語られたものです。2) 3節「イエスは、二艘の舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの二艘であるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。」と。そして主イエスは、話し終わった時に、シモンへ舟を借りたお礼の意味であろうと思いますが、4節「話し終わったとき、シモンに、『沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい』と言われた。」とあります。

ここで、注目すべきことは、この五節以下の出来事で、シモンの「先生、私たちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」との言葉によって始まるものです。シモンは、ここで答えているように、シモンたち漁師は、昨晩から夜通し働きましたが、何の獲物も全くなく、疲労と失望のうちに網を洗っていたというのです。その心情は、早く家に帰って、床に入りたいというものでありましよう。疲労困憊し、空腹の上、主イエスの説教までつきあったのですから、それはなおのことでありましよう。そして何より、漁師として生きてきたシモンにとって、魚のことは誰よりもよく知っているその道のプロです。その漁師のプロが長年の経験と豊富な知識や情報をもとに「夜通し苦労し」たが、全然何も取れなかったというのですから、ここにはおそらく非難も込められているのであろうと思えます。漁にとつて夜は最良の時である。漁の専門家が正しい時間に漁をして、何もとれなかったのに、主イエスが、いくら先生であつたとしてもその依頼で漁を試みるのは無駄である、不可能であるとペトロは語っているのかも知れません。そこで「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われても、到底無理なことであり、無駄なことだと思つのは当然なことでしょう。しかし、主イエスの命令であるので不承不承、「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」と答えたも

のであらうと思います。いわば仕方なく舟を沖に漕ぎ出して網を降ろしてみたのです。そこには、今更網を降ろしても、何も取れまいという思いの方が強かったと思います。全く無意味で時間の無駄であったと思います。何度やつても駄目であった不可能なものが、可能になるとは思えない、そういう諸々の思いがあつたと思います。

しかし、シモンは驚きました。網を降ろすとすぐに、おびただしい魚の群れが入つて網が破れそうになつたからです。そこでもう一そうの舟にいた仲間に加勢に来るよう合図したので、彼らが来て取れた魚を両方の舟一杯に入れたのですが、そのために舟が沈みそうになつたと聖書は記しています。6〜7節「漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになつた。そこでもう一そうの舟にいる仲間合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになつた。」と。

ある学者によれば、この大漁の奇蹟物語は、ヨハネ福音書二十一章3〜6節に「3シモン・ペトロが、『わたしは漁に行く』と言うと、彼らは、『わたしたちも一緒に行きなう』と言つた。彼らは出て行って、舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかつた。4既に夜が明けたころ、イエスが岸に立つておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかつた。5イエ

スが、『子たちよ、何か食べる物があるか』と言われると、彼らは、『ありません』と答えた。6 イエスは言われた。『舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。』そこで、網を打つてみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかつた。」と記されているように、主イエスの復活後の顕現について語る物語の変形と考えられています。しかしルカ福音書と記述との差異はあまりに多く、またあまりに大きいものです。

けれども、このヨハネ福音書の中で、興味をひく言葉があります。それは6節の「イエスは言われた。『舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。』そこで、網を打つてみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかつた。」とあるように、ルカ福音書では、6節で「そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになつた。」と、どこに網をおろすのかは書いてなくて、このヨハネ福音書だけは、網を打つ、或いは網を降ろす方向を示しているというものです。

このことをふまえながら、今、この大きな奇跡的な大漁を見て、シモン・ペトロは、主イエスが人間の目には見えない海の中の魚の動きまで、すべて見通しておられる神の全能と全知の力を持つ方であると直感したのです。そして、主イエスの言葉に従えば、いかに大きな豊漁となるも

のか、シモンは痛切に知らされたのです。そこで8〜10A節「8 これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。9 とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10 シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。」これに対して主イエスは、シモンに「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」と語られ、シモンだけでなく、シモンの仲間、ゼベダイの子ヤコブもヨハネも「すべてを捨ててイエスに従った。」と4人の弟子が主イエスに「すべてを捨てて」従って行ったことを告げるものです。

そこで、再度ルカ福音書を注意深く見るとき、ここには、弟子の召命物語の他に、最も重要な出来事が描かれていることに気づかされるのです。それはこの一連の大きな出来事が起こる、奇蹟が始まる。神の大きな力、恵みの賜物が与えられるその源は、「神の言葉」を聞き従うとき起こるものだ、ということなのです。この「神の言葉」とは、神について語る言葉のことではなく、むしろ神から語り示された大いなる言葉、神からの真理なる言葉、福音の言葉を「神の言葉」としている点です。この神から出た言葉が主イエスの口を通して聞こえる。神の御国の福音が主イエスを通して人の世に語られる。すると、この「神の言葉、福音」におびたらしい群衆が、網が

破れそうになるほどおびただしい魚が反応を示すようになる。そこでルカは、真なる「神の御言葉」が語られるならば、それをただの「言葉」ではなく、むしろ「御言葉ですから」と受け止め直し、神の語られる方向へ自らの生活の舵を向けることが重要であると私たちに告げ知らせているのではないだろうか。

そこで「神の言葉」を聞くとは、「神の御言葉」が語られるならば、そこにすべてにおいておびただしい収穫がある、人はその人生を変えてまで神の言葉に従う決意を持つということに驚かなければならない。しかし、誰もそんなことは「神の御言葉」を聞くまでは微塵にも思つてなかつたのです。でも「神の言葉」が語られるならば、多くの魚や人や弟子たちが集まる、このことに私たちは驚くべき喜びと希望を見る必要があるように思うのです。私たちは何よりも「神の言葉」がもたらす成果や確信、これを私たちは大きな驚きと共に、私たちのものとさせていたたくことをいつも祈り求めることが、今の私たちにとって何より大事なことであると思わされるのです。

コロサイの信徒への手紙1章5〜6節に「それは、あなたがたのために天に蓄えられている希望に基づくものであり、あなたがたは既にこの希望を、福音という真理の言葉を通して聞きました。

あなたがたにまで伝えられたこの福音は、世界中至るところでそうであるように、あなたがたのところでも、神の恵みを聞いて真に悟った日から、実を結んで成長しています。」との言葉があります。ここにも、福音という真理の言葉、神の真の言葉が聞かれたのなら、その日から「実を結んで成長します」と記されています。ここより教えられることは、私たちは自分の身の回りの事柄を思うとき、すぐに成果や効果とは何か、を考えてしまいがちで、時間的や数量的なものを重視してしまいます。しかし、それはルカ福音書のシモンたちが徹夜であくせく働き、どこで漁をしたら獲物があるかと、議論し方策を色々に変え、技術的に人間的な思いや考えで過ごすこととどこか似ているものではないでしょうか。けれども、最も大事なことは、遅いか早いか、どこで何をすれば効率や成果がよいのか、何をすれば最善の方法であるとか、そういう問題ではありません。むしろルカ福音書を通して、主イエスはそんな人間的な言葉を語られてはいないということです。むしろ「神の言葉」が確かに語られているならば、遅かれ早かれ、おびただしい実りがある、そのような「神の言葉」、福音の言葉に近い御言葉が礼拝を通して、語られることを私たちが何より祈っていく必要を思うのです。そして、限りなく神の言葉に近い聖書の御言葉が語り続けるならば、いつかわかりませんが、しかし必ずやおびただしい人の胸に、神の言葉が聞かれ、その神の言葉の下に、多くのものが押し寄せるときがくると思うのです。主イエスは、ペトロを

始め、私たちに、その神の言葉なる「網」を降ろしてみなさい、と語られたのです。そして、その網はペトロだけでは上げることが出来ず、仲間で行いました。つまり、神の言葉というものは、自分だけでなく、皆で求めて、この世に、常に「御言葉ですから」と、その心の襟を但し、与えられた御言葉をもう何度も聞いたではなく、新たに聞き直し、その福音の網を神の言葉に聞き従って降ろすことが重要なのです。

最後に、今日のルカ福音書の御言葉を通して、私たちは、今「神の言葉」の力と導きに絶対の信頼と信仰を寄せ、そして私たちを通して「御言葉ですから」と「神の言葉」が限りなく語り出され、わき出ることを皆でひとつとなつて祈ること、神の御言葉をしっかりと受け止める信仰を祈り求めるこそ、私たちが何よりもまず始めなければならない働きであると思わされるのです。この新年も「神の言葉」が語られることを互いに祈り求め、「神の言葉」に思いも心も信仰も一致し、主イエスの福音の御言葉に多くの人々が「御言葉ですから」と私たちの教会に來られることを心から願ひ求めて、この2017年を歩みたいと思います。

〔祈り〕

憐み深く、私たちに救いをもたらす主イエス・キリストの父なる神よ、

あなたは今日の新年礼拝、2017年の信仰の歩みをルカ福音書を通して、私たちに教え示してください。心から感謝いたします。

どうか、シモン・ペトロが、主イエスを通して語られる神の御言葉、そのものに、大きな出来事が起こる、奇蹟が始まる。神の大きな力、恵みの賜物が与えられることを気づかせられたように、私たちもまた「神の御言葉」を単に聞くものではなく、むしろ「御言葉ですから」と、そこに大いなる神の力と多くの働きが生じることを信じ、受け止め直し、神の語られる信仰の道に、信仰をもって、信仰の襟を正して聞き従う者と得させてください。

神の御国の福音が主イエスを通して人の世に語られる。その働きに参与するために、私たちは救われ、キリスト者として召されたことを忘れることがないように、主よ、あなたの尊い御言葉を軽んじることがありませんように、私たちを正しく守り導いてください。

特に、今試練と苦悩の中にある兄弟姉妹の上に、主の御言葉が与えられ、その大きな御力と奇跡を経験することができますように、主よ、どうかあなたの出会いと慰め、平安への導きを豊かにお与えください。

愛の主よ、今日より始まる新しい2017年の歩み、主と共に歩んで下さる恵みと喜びが聖
霊の働きと共に豊かにありますように。これらの祈りを、主イエス・キリストの御名によつ
て祈ります。アーメン

命の価値

仙台東六番丁教会 中本 純

サムエル記（上）十六章五節後半～十三節

5…サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。7しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」8エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前なら通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」9エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」11サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っています。今、羊の番をしています。」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連

れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」¹² エツサイは人をやって、その子連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」¹³ サムエルは油の入った瓶を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」紀元前一〇世紀頃にイスラエル統一王朝を築き上げたダビデが国王として召し出された時の記述がこの聖書箇所に記載されています。この中でとても重要なポイントとなる言葉が七節の言葉、「人は目に映ることを見るが、主は（つまり神様は）心によって見る。」という言葉です。この時代、イスラエルは地域ごとに様々な部族が暮らしており、それら部族が覇権を求めて争いに争いを重ねる戦乱の時代を迎えていました。そうした中、戦乱の世を終わらせるべく、イスラエルに新たな国王を立て、この争いの時代を終わらせようと、国王招聘の動きが起ります。

国王を招聘するにあたり、神様から遣わされた預言者サムエルがその役割を与えられます。彼は、

エッセイという人の家へ行き、そこに暮らす子どもたちに目を向けます。しかし、イメージして頂ければお分かりになると思いますが、戦乱の世を治める王を選ぶ作業です。そこにはどうしても、理想とする人物像というものが生まれてきます。この時代の国王は戦場の最前線に立つて指揮を司る役目があります。皆さんがもし、サムエルのような国王選任の人事の責任を与えられたらどのような人物を選ぶでしょうか？ちよつとイメージして頂きたいと思います。この時代、人々が国王に求めていたものは、優れた戦略と政略はもちろんのこと、戦場にいる兵士たちの士気を高める強いカリスマ性であり、それらを兼ね備えた人物こそ、理想の国王像でありました。

エッセイの家にやってきたサムエルは、その長男であるエリアブを見て、「彼こそ主の前に油注がれる者だ」つまり、「彼こそ国王になるに相応しい人物だ」と思いました。その理由は簡単で、エリアブという人は体格に恵まれ、いかにも鎧や兜が似合う、そのような「絵になる人物」であったからです。しかし、そのように考えるサムエルとは別に、神様は先程の言葉、「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」この言葉をサムエルに投げかけて、考えを留まらせるのです。エリアブが駄目ということ、サムエルは「他の子どもたちも見せて欲しい」とお願いします。エリアブの弟である、アビナダブ、シャンマが続けてサムエルの前に通され、紹介されます。いずれも体格に恵まれ、国王になるに相応しい人物かに見える人々でした。しかし、これらの人々

も神様の目から見れば、国王に相応しくはなかったのです。

7人の兄弟がサムエルの前に通され、紹介されました。そこでサムエルは家の主人であるエツサイに尋ねます。「あなたの息子はこれだけですか。」するとエツサイは答えます。「末の子が残っています。今、羊の番をしています。」

この文章を読んでお気付きになるでしょうか？イスラエル王国の人事の責任を負ったサムエルが我が家にやって来たということで、最高のおもてなしをしていたエツサイです。自慢の子どもたちを次から次に紹介します。しかし、末の子のダビデについては、最初から紹介するつもりは無かったのです。それどころか、サムエルから「あなたの息子はこれだけですか？」と尋ねられるまで、その存在すらも隠していたようです。どうして、そのようなことをしたのでしょうか？その理由とも取れる文章が一二節に書いてあります。そこにはダビデの風貌について、次のように記されています。「彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。」一見、褒め言葉のように見えます。いや、実際、この言葉は最高の褒め言葉です。ここに記されている言葉は元々の言葉を見てみると、「見た目が美しく、綺麗な顔立ちであった。」そういった内容の言葉として読み取ることが出来ます。これ以上の褒め言葉はありません。けれども、よく考えて頂きたいと思います。このダビデやサムエルが生きていた時代は戦乱の時代です。戦乱の時代において

は、戦場の最前線に立つ屈強な体格を持った人物こそが、優れた男性像でした。従って、「血色が良く、目は美しく、姿も立派であった」そのようなダビデは、戦場に立つ者として、果ては「理想の男性像」からはかけ離れた人物として見なされていたのです。実際、これから少し先の箇所でも、イスラエルの兵とペリシテ人が戦争を行った際、ダビデは戦場の最前線である幕営に立ち、そこにいた兵士と話します。すると、その様子を目撃したお兄さんのエリアブが「何をしにここへ来たのか。羊の世話はどうなったのか。」と腹を立てて叱責しています。体格に恵まれた者は戦場に立ち、そうでない者は羊の世話でもさせておく、というのがこの時代の人々の価値観であったのです。しかし、そのように周りの人々から「戦場に相応しくない」、「国王として到底相応しくない」そう思われていたこのダビデが、これから先、イスラエル統一王朝を築き上げていくこととなるのです。

私たちは毎日の生活の中で、自分が活動をするその限られた空間の中での「狭い価値基準」を元に人を評価してしまったり、判断してしまったりすることがあります。良い評価ならともかく、悪い評価を下してしまうこともあります。「周りの人があのようになっているから、あの人はきつとこうなんだろう」といつの間にか評価を下してしまっていることがあります。それは他人に対しての評価のみならず、時に自分で自分に対して行ってしまうこともあります。「周囲の人が『お

前はダメな奴だ』と言っているから、自分はどうせダメな奴なんだろう。」と勝手に決めつけてしまふようなことだつてあります。けれども、それは本当にその人の価値を知っている者の判断なのでしょう。か？よくよく考えてみると、私たちは周囲の人々の振る舞いや言動から、その人の部分的な性格や、思考、特質といったものを垣間見ることは出来ます。けれども、それはあくまでその人のほんの一部分に過ぎません。「その人の人生がどのようなもので、そしてこれから先、その人がどのような出会いを経験し、また成長していくのか？」そのことを私たち人間は到底はかり知ることは出来ません（親であるエッサイでさえ、息子ダビデがまさか国王になるなんて、思つてもみなかったのですから）。周囲の人々のみならず、それは自分自身についても同じであると言えます。聖書は、私たち一人ひとりに命を与え、育ててくださっている神様こそが、私たちの本当の価値を知っていることを伝えます。神様は旧約聖書『イザヤ書』の中で、「わたしの目にあなたは価値高く、貴く、わたしはあなたを愛している」そうおっしゃっています。たとえば、私たちが自分の価値を卑下してしまふような時でさえ、そして自分で自分に見切りをつけてしまふような時でさえ、神様は私たちを「価値ある者」として、決してあきらめておられないことを教えてくださるのです。

わたしのもとに来なさい

石巻山城町教会 関川 祐一郎

マタイによる福音書 第十一章二五〜三〇節

25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。26 そうです、父よ、これは御心に適うことでした。27 すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。28 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。29 わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。30 わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

「主われを愛す」という有名な讚美歌があります。この讚美歌はキリストの愛が直球で歌われている讚美歌です。「主われを愛す」の一番の歌詞は次のようなものです。

「主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも 恐れはあらず」

ここに歌われていることは、何よりもまず、主なる神が私たちを愛して下さっているということです。そして神さまはその愛ゆえに、イエス・キリストを送ってくださいました。キリストもまた私たちを愛するがゆえに、わたしたちのために徹底的に仕え、わたしたちの身代わりとなって十字架の死を引き受けてくださったのです。

この主イエスがお語りになったのが先ほど朗読した聖書の言葉です。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。

主イエスのもとにこそ、本当の安息がある、だからこそわたしのもとに来なさいと主イエス御自身が私たち一人一人を招いてくださっています。

わたしたちの人生は必ずしも順風満帆というわけにはいきません。人生の旅路において、様々なことに悩み、苦しみ、疲れを覚えます。

今から数千年前を生きた聖書の民イスラエルもわたしたちと同じように、多くの苦しみを経験しました。どんなに時代が移ろい、科学や文明が発達し、人間の暮らしが豊かになっても、人間

が経験することは本質的に変わりません。イスラエルの民はあるときには自分の国が敵に踏みこじられ、家族と引き裂かれる耐えがたい苦しみを経験します。また、あるときには突如降りかかる災害や病に苦しみます。そうした中で、イスラエルの民は神さまを求めました。

旧約聖書の詩編一二八編に次のような祈りの言葉が綴られています。

「苦難のはざまから主を呼び求めると　主は答えてわたしを解き放たれた。主はわたしの味方、わたしは誰を恐れよう。人間がわたしに何をなしえよう。主はわたしの味方、助けとなって　わたしを憎む者らを支配させてくださる。人間に頼らず、主を避けどころとしよう。君候に頼らず、主を避けどころとしよう。」

この詩編の言葉を歌った人は、決して人間の苦しみ、悩み、重荷と無縁に生きていたのではありません。むしろこの人自身が苦難のはざまにいたのです。その苦難の中で、紡ぎだされた祈りの言葉が今紹介した詩編の言葉です。

「苦難のはざまから主を呼び求めると　主は答えてこの人を解き放たれた」のです。聖書が証している神は、わたしたちの祈りに必ず応えてくださるお方です。わたしたちが「神さま」と呼びかけるとき、この呼びかけに応答してくださるのです。

この箇所「解き放たれた」と訳されている文章は、別の翻訳では「わたしを広い所に置かれた」

と訳されていました。英語では *set me in a large place* と訳されています。狭い場所に閉じ込められて身動きの取れないような苦しみがあります。もはや自分ではどうすることもできない状態です。しかし、神さまはそのようなわたしたちをそこから解放して、広い場所に置いてくださるということです。神さまが助け、救い出してください。だからこそ、自分の力を頼りにするのではなく、神にすべてを委ね、神さまにこそ信頼を寄せなさいと聖書は語ります。

聖書が証しする神さまはしっかりと一人一人に目を留めてくださるお方です。その神さまのみ心はわたしたちが滅びることではありません。わたしたちが本当に神さまのもとに立ち帰ることこそ、神さまが最も望んでおられることです。

主なる神さまが、わたしたちを罪の闇から救い出すために、イエス・キリストを与えてくださいました。イエス・キリストはご自身には罪がないにもかかわらず、わたしたちの罪をたつた一人で引き受けてくださり、罪を贖ってくださいったお方です。なぜ、罪のないお方であるにもかかわらず、すべてを引き受けてくださったのか。そこにはわたしたち人間に対する完全な愛があります。この破れのない完全な愛ゆえに、主イエスはいかなるときも、わたしたちの傍らから離れることなく、共に歩んでくださるのです。喜びの時も悲しみの時も、苦しみの時も、わたしたちの人生のすべての場面において真に寄り添い続けて下さるお方こそ、わたしたちの救い主なるイ

エス・キリストなのです。この完全な愛に支えられて生きることこそ、真の幸福があるのです。主イエスは言われます。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてください。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

主イエスは「わたしの」轡を負いなさいと言われました。「轡」とは何でしょうか。「轡」というのは牛などの家畜が荷車などをけん引する際に二頭の牛をつなぐために用いられた棒状の道具のことです。この轡を二頭の牛の首にかけて二頭が一体となつて重い荷物などを引いて行きました。簡単にいえば二頭の牛を横に並べて一緒に動かすための道具、それが轡です。主イエスは「わたしの」轡を負い、わたしに学びなさいと言われる。「わたしの轡、そのもう片方にあなたも共につなげなさい」とおっしゃるのです。それは、様々な試練をわたしたちが辛抱強く耐えしのびなさい、ということではありません。そうではなくて、主イエス御自身がわたしたちと一体となつて共に歩もう、と呼びかけてくださっているのです。主イエスの轡を負うということは、言いかえれば主イエス御自身がわたしたちの轡をも負ってくださるということなのです。

もはや苦しみの中、孤独の中で、自分一人で苦しみそれを乗り越えようとする必要はない。わたしがここにいる、わたしがその荷を共に負う、だからわたしのもとに来なさい、主イエスはこ

のようにわたしたち一人一人を招いておられます。わたしたちの重荷を、主イエスが御自分の重荷としてくださり、わたしたちを正しい道、真の幸いへと導いてくださるのです。

今日導かれて礼拝に集められたということは、その一人一人がこの主イエスの招きを受けているということです。主イエス御自身が「わたしのもとに来なさい」と語りかけてくださっているのです。

これから先、わたしたちの歩みにはまだまだ多くのことがあるでしょう。予期せぬことが突如として起こるといえることがあるかもしれません。今日この礼拝をささげている私たちが、そのときこそ覚えていきたいことは、わたしたちは決して1人でこの世界に放り出されているのではないということです。イエス・キリストが今なおわたしたちを愛してくださっていて、わたしたちの重荷とともに担ってくださいるからです。苦しみや悲しみに支配されて、孤独を感じるようなときがあっても、実はそのときこそ主イエスがわたしたちを背負って歩んでくださっていることを心に留めたいと思います。

「主われを愛す」この福音の喜びにわたしたち一人一人が招かれているのです。

新しい掟

東北学院中学校・高等学校宗教主任 松井浩樹

ヨハネによる福音書 第二三章三二節〜三五節

31 さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。32 神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。33 子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることはできない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言っておく。34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆知るようになる。」

キリストの十字架前夜の場面です。主イエスは、弟子たちに「新しい掟を与える」と語られています。十字架前夜ですから、キリストの遺言にあたる重い言葉として受け止めたいと思います。その「新しい掟」とは、具体的には「互いに愛し合いなさい」であります。ところがどうでしょうか。キリスト教学の時間や、この礼拝でたびたび耳にするのであります。もつとも、旧約聖書のレビ記や申命記でも大いに語られているので弟子たちにとつても、とりわけ新しさを感じないとも思えるのです。

ところがよく読んでみますと、その違いが鮮明になってまいります。まず、旧約聖書に記されるいわゆる「隣人愛」と呼ばれる教えは「自分を愛するように、隣人を愛しなさい」であります。つまりその「隣人を愛する」根拠は、「自分を愛する」ということです。しかし、今日の記事で主イエスは「わたしがあなた方を愛したように」という大きな違いを見ることができます。だから、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と続くのです。なるほど旧約聖書を超えての、まさに「新しい掟」であることは確かなのです。ここで思い起こしていただきたいのは、この「新しいこの掟」が主イエスの十字架前夜に語られた遺言であるということです。したがって、「自分を愛するように」ではなく、徹底して主イエスが十字架で犠牲になられるまで私たち一人ひとり愛されている、

愛しぬかれたがゆえに、私たちも互いに愛し合わなければならぬのであります。つまり、隣人愛の根柢は徹底してイエス・キリストを土台とするからこそ「新しい掟」となりうるのです。

ここで「互いに愛し合いなさい」と、教えを聞いた私たちは聞きさわりの良い言葉であるというだけで終わってはならないでしょう。十字架前夜の遺言として、しっかりと聴き覚えたいと思うのです。まず初めであります。私たち内部の強化、つまり東北学院としての団結がもたらされるでしょう。「みんなで仲良く」であるとか「みんなに親切にしましょう」は聞いたことがありますが、「互いに愛し合う」という団体はあまりありません。したがってまずこの教えを聴く、そして互いに知り得た私たちにある程度の団結を促すであります。といわれても、自我が芽生えた大学時代を生きる私たちは、そういわれるほど愛し合えないかもしれません。けれどもその根柢として、キリストが私たちを愛し抜かれた、それゆえに少なくとも他者に対しては、やさしくしなければならぬ、配慮をしなければならない、尊重をしなければならない、そういう思いの中で大学生活を送るのであります。

そしてもう一点です。大学内部の団結にとどまりません。今日の最後の言葉にありました。「互いに愛し合うならば、私の弟子であることを皆知るようになる」と記されるのです。つまり隣人愛の実現が、実際に外に向かって証しされるという形で開かれていることも想定されているの

です。例えば、皆さんの言動であります。ボランティアにきてくれた、道案内をしてくれた、助けてくれた、席を譲ってくれた、探し物を探してくれた・・・苦情ではない感謝の連絡、お褒めの言葉の連絡は本当に嬉しいものであります。また仙台近郊には六万人、全世界には一六万人といわれる卒業生たちの犠牲・奉仕の精神は、この世に対して大変よい働きをしていることは頼もしい限りであります。

聖書の言葉に日々、耳を傾ける私たちは、今この「愛に満ちている」とはいえない現代社会にあつて、「互いに愛し合う」ことを、おのずと世に示していくようになるとの大きな期待を、主イエスはもちろんのこと、ヨハネ福音書も大きく「新しい掟」として今日、私たちに示すのであります。人を蹴落とし、上に立つことをよしとする、でありません。仕えあい、支えあうことにおいてこそ、人間としての本来の自立が与えられる。そしてそこにこそ、生きる喜びがあることを間接に、直接に指し示す使命が私たちに与えられているのです。もつと広げるならば「互いに愛し合う」という「新しい掟」に基づいて社会を形成しつつ参与する、またそういう共同体をその場で作り上げていくことが、私たちに委ねられているのです。

新しい月が始まりました。様々な意味での「実りの秋」を迎えています。皆様の大学生活の大きな中心に、「互いに愛し合う」を心に留めていただきたい、そして落ち着いて、日々の生活を歩

んでまいりたいと願うのです。

祈り

天の父なる神、

静かな礼拝の一時を感謝いたします。新しい掟、御子イエスキリストが私たちを愛してくだされた、同じく、私たちも互いに愛し合う、よい言葉として心にとどめさせてください。

小さき祈り、主の御名によって祈ります。アーメン。

神の愛を受け取る者として

東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任 西間木 順

コリントの信徒への手紙一 一三章一―一三節

1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしい
どら、やかましいシンバル。2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識
に通じていようと、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持つていようと、愛がな
ければ、無に等しい。3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわ
が身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。4 愛は忍耐強い。愛
は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。5 礼を失せず、自分の利益を求めず、
いらたたず、恨みを抱かない。6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。7 すべてを忍び、すべてを信じ、
すべてを望み、すべてに耐える。

8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、9 わたしたちの知識

は一部分、預言も一部分だから。10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。11 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見るようになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はつきり知られているようにはつきり知ることになる。13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

今日共に読みました聖書の箇所は、皆さんも一度は聞いたことあるのではないかと思います。よく結婚式でも読まれている箇所です。「愛」という言葉が何回も出てきておりますから、「愛の讃歌」と呼ばれている箇所です。使徒パウロが「愛」について語っています。ここでパウロが言う「愛」とはどのような「愛」なのでしょう。私たちが「愛」という言葉を聞いたときに、真つ先に思い浮かべる「愛」とはどのようなものなのでしょう。

この箇所だけを読むだけでは、実は、パウロが伝えようとしていることを正確には捉えることが

できません。聖書はある箇所だけを取り出して読むよりも、その書物を一気に読んだ方がいいのです。その方がその書物が言おうとしていることを、捉えることができるのです。

今日の箇所は、パウロがコリントの教会に宛てて書き送った手紙の中にあります。コリントの教会は、パウロが伝道してできた教会のひとつです。パウロはコリントに一年半滞在し、熱心に福音を宣べ伝えていました。そして教会ができたのです。パウロは他の地域にも福音を宣べ伝えるために、コリントを離れます。その後、コリントの教会にパウロとは異なる福音を宣べ伝える伝道者がやってきたのです。その結果教会は分裂をしてしまいます。いくつかのグループに分かれ、互いに批判しあったのです。そして、グループが違うというだけで、共に礼拝を守らなくなってしまうましたし、特に聖餐に与ることをしなくなりましたのであります。

このことを知ったパウロは、分裂した教会を叱責し、一つになるように勧めるこの手紙を書いたのです。今日読んだ箇所の前の箇所には、教会とはどのようなものか、を教えています。教会の一致を教えているのです。一二章三一節に「あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。」と書かれてあります。その「教会一致の勧め」に続いているのが今日の箇所なのです。そうしますと一三章にある「愛」は、大きな賜物を受けることができる最高の道であることがわかります。

この「愛」はどのような「愛」なのでしょう。この愛は、ギリシア語では「アガペー」です。アガペーとは、神の愛のことです。私たちが生きていくうえで、神の道を主イエスと共に歩むうえで、必要なものは、この「神の愛」なのだ、とパウロは教えているのです。この愛は、私たち人間の心から生まれ出るものではありません。神から生まれ出る愛なのです。

一三章一節から三節には、「愛がなければ」と三回出てきております。私たちは自分たちの人間関係が、もし「愛がなければ」どのようなものになってしまうのか、考えたいのです。「愛がなければ」人間関係はうまくいかないのではないか、と思います。互いに愛の関係に結ばれたときに、その関係はうまくいくのではないかと思えます。私は高校で教員をしております。教員になったばかりのところだったでしょうか。ある研修会で講師の先生が、「先生方は生徒を愛しておられますか？」と質問したのです。その講師の先生は、「授業とは、生徒に愛を伝えることなのだ」と言われました。生徒と教員が愛の関係になれば、その授業は生徒にとっても、教員にとっても何の実も結ばないというのであります。愛の関係に結ばれたときに、授業がそれぞれにとって実を結ぶのだと言われたのです。

パウロは「愛がなければ」、福音を宣傳伝えている自分は、騒がしいどころ、やかましいシンバルのようなものなのだ、「愛がなければ」、すべてが無に等しいのだ、「愛がなければ」、何の益もな

いのだと言っています。

それではパウロは神の愛をどのように考えているのでしょうか。それが四節から七節に書かれています。「愛は、忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

このように聞くと、私たちの力では、できないことばかりではないでしょうか。私たちは自分の心を満たそうとしてみようからです。自分の心を満たそうとすると、おのずと限界があります。終わりがあります。しかし神の愛には終わりはないのです。神は目に見えない永遠の世界にいらっしゃるお方です。その永遠の世界から来る愛には終わりがありません。滅びるような、無くなってしまうような愛ではないのです。八節に「愛は決して滅びない。」と書かれています。口語訳聖書では、「愛はいつまでも絶えることがない」でありました。この愛が私たちの心の中に注がれているのです。ですから、私たちはこの神の愛を正しく受け取る者でありたいのです。その受け取った神の愛で、自分自身を新しく造り変えていただくのです。神の愛を正しく受け取り、その愛を用いて、この世の歩みをしていきたいのです。この愛を用いて、時には共に喜び、共に悲しみ、時には、互いに赦し合っていくのです。そのために、私たちは、自分自身を見るのではなく、人

間を見るではなく、目に見えない世界におられる神に、主イエスに目を注いでいくのです。それが、信仰でありましょう。信仰を持つことで、希望が与えられる。その希望が与えられたときに神の愛を知る、神の愛を知るから、信仰を持ち続けることができる。信仰と希望と愛とは連続性の関係にあるのであります。その中で最も大いなるものは、神の愛なのであります。神の愛の中で私たちは、生かされているのであります。この神の愛が私たちの心に注がれているのであります。だからこそ私たちはどのようなときも、希望を持って生きることができないのではないかと思います。

〈祈り〉

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え共に礼拝を捧げることができまことを感謝いたします。

どうぞ、あなたが私たちの心に注いでくださっている愛を正しく受け取り、その愛を用いていくことができますように。

この祈り 尊い我らの主 イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

実りある人生を送るために

宗教部長 野村 信

ルカによる福音書 八章一八節

¹⁸だから、どう聞くべきかに注意ちゆういしなさい。持つもている人は更さらに与あたえられ、持つもていない人は持つもっていると思おもうものまでも取り上あげられる。

アウグスティヌスという人の名前は聞いたことがあると思いますが、紀元三三五年から四三〇年まで生きた人で、西洋の神学、思想、哲学、教育など、幾つもの領域に影響を与え、西洋キリスト教世界の土台を築いた人です。アウグスティヌスは自分の本の中で、こう語っています。「言葉によつては、何も新しいことを学んでいない。言葉による学習は事実そのものに触れて初めて成立する。」（教師論）これは、私たちが今、最も耳を澄まして聴くべき大切な教えです。すなわち、私たちはまさに言葉の洪水のような世界に生きているからです。本を読んでも、手っ取り早く要

点だけを掴み、「分かった」と思つて、次の本へ向かつて行きがちだからです。

小学校、中学校、高等学校、しかも大学でも、教師から教えられたことをその場で聞くだけで、「分かった」と思い込み、一つ二つを吟味しないで聞き流していると、いわば、料理のレシピをたくさん買い込んで、料理についての知識は豊富なのに、いつになつてもおいしい料理を作ることが出来ない人のようなものです。

言葉を理解するだけで済ましていると、言葉は本来人々に共通しているもので、自分のものではありませんから、人のもので生活していることになり、その内、言葉そのものに魅力が感じられなくなり、言葉に対する興味が湧かなくなると、学んでも楽しいという気持ちが生じなくなり、そのうち人生そのものが色あせてきます。なぜなら人間は多くを言葉で理解して記憶にしまい、言葉で記憶を呼び起こすからです。私たちの日常は刻々と過ぎていきますが、それらは記憶となつて私たちに蓄積されます。ところが、その蓄積が実感のない、中身の無いものであると、私たち自身の中には空しい、もみ殻のような表面的なものしか蓄えていないことになります。

アウグスティヌスは、キリスト者になる前は修辞学者でしたから、言葉のもつ性質としくみを熟知していました。そして、先の引用、「言葉によつては、何も新しいことを学んでいない。言葉による学習は事実そのものに触れて初めて成立する」という教えを彼の時代にしみじみと感じて

いました。多くの言葉が氾濫し、しかも嘘、いつわり、ごまかしが横行し、言葉が空を打つという虚しさが広がっていました。しかし、これはアウグスティヌスの時代だけでなく人類が言葉を使う限り、いつも生じることで、今も忘れてはならない大切な戒めです。

主イエス・キリストは神の言葉を語られました。神の教えを様々に語りましたが、どの一つも、しっかりと吟味し、味わい、感謝し、喜ぶべき教えを語られました。聞く私たちが一つ一つを自分の経験と世界の事象と重ね合わせ、納得いくまで熟考するように求めておられます。ですから、「**どう聞くべきか注意しなさい**」と言われます。誰の言葉でも吟味しつつ聞くべきですが、キリストの言葉はなおさら注意して聞くべきです。

内実が問われています。言葉であるなら、それが指し示す事実や実体、内容を確認し、実感し、了解していく作業が求められています。それはまどろっこしい、時間のかかる取り組みですが、これを飛ばすと、実は、中身の無い、あたかも砂で城を作って満足している人のように危ういものです。

そこで、キリストは言われます。「**持っている人は更に与えられ**」ると。つまり、時間がかかっても言葉で学んだことを吟味し、自分のものとして自分の中に蓄えていく人は、実感の伴った蓄積があるので、次の学びからもまた新しい蓄積を得られますが、「**持っていない人**」、すなわち、

言葉の内実を確かめもせず、ただ聞くだけですましてしまう人は、空しいものを積み上げていくようなものです。あたかも大きな砂の城を作り上げ、それが大きければ大きいほど、崩れるととてつもない崩壊を引き起こします。大きな喪失感の中で途方に暮れてしまいます。それは、キリストの言われるとおり、「**持っていると思うものまでも取り上げられる**」からです。

私たちは、「燃え尽きた」という言葉を知っています。それは、長い間全力で取り組んできたのに、最後に報われなくて、失われていく姿です。努力した年月はなんと空しく、無駄な日々であったことでしょうか。

そこで、本日の話は、次の一言でまとめられるかもしれません。

秋になるとなぜ木々は実を実らすのか。

それは、言葉を使わないからだ。

つまり、一つ一つをきちんと実行しているのです。実践しているのです。体の中に養分をせっせと蓄え続けているからです。私たちは、植物や動物よりもはるかに賢いのに、なぜ、学んでも身に付かず、教えられても役に立たないのか。さらに聖書の言葉は、いつも虚しく空を切るのか。

それは、言葉で積み上げているということがあるからです。言葉だけで、内実の伴わない作業を繰り返しているということがあるのです。

私たちの人生に実りが欲しいのです。私が確かに作った、私の作品が欲しいのです。私の人生という作品です。誰でもない、私の人生をしっかりと実感するために、手ごたえのある毎日を送りたいと思います。大学生の皆さんは、大学での学びに何よりも手ごたえを感じてほしいと思います。聖書が語る一つ一つがとても大切なことであると実感してほしいのです。そのためには、手間ひま惜しまず、学んだことの内実を確かめ、吟味し、消化していくことが欠かせません。

皆さんのこれからの学び、さらに聖書からの学びにおいて、豊かな実りが得られるように心から願っています。

光にあゆめよ

大学宗教授主任 阿久戸 義 愛

ヨハネによる福音書 第六章一六―二二節

16 夕方ゆうがたになつたので、弟子でしたちは湖畔こはんへ下りて行つた。17 そして、舟ふねに乗り、湖みづうみの向こう岸ぎしのカファルナウムに行こうとした。既に暗くらくなつていたが、イエスはまだ彼らかれのところには来ておられなかつた。18 強い風かぜが吹いて、湖みづうみは荒れ始めた。19 二十五ないし三十スタディオンばかり漕こぎ出したころ、イエスが湖の上うへを歩いて舟ふねに近づいて来られるのを見て、彼らかれは恐れた。20 イエスは言いわれた。「わたしだ。恐れることはない。」21 そこで、彼らかれはイエスを舟ふねに迎むえ入れようとした。すると間まもなく、舟ふねは目指す地ちに着ついた。

主イエスは弟子達に、舟に乗つて向こう岸のカファルナウムに向かうように命じました。この頃、イエスは大変評判の教師となっていました。イエスが行くところ、大変大勢の人々がイエスを追

いかけてまわりました。そうした群衆の中には、この特別な力をもったイエスという人物を自分の王に担ぎ上げ、そして自分たちの国を支配しているローマ帝国を打倒する旗頭にしようと考えてる人たちがいました。彼らがイエスを王に祭り上げようとして大騒ぎになったので、イエスは弟子達にこの騒ぎを避けて逃げるように命じたのでした。弟子達は急いで舟に乗り、沖合にこぎ出しました。ところが日が暮れてから、弟子達だけで乗っていた舟に、強い風が吹いてきます。嵐が来たのです。しかも、もう舟をこぎ出さず、舟に乗り、簡単に岸に戻る距離ではありません。すでに日は暮れ、あたりは真っ暗になっていました。現代のように照明器具などはありませんから、暗い湖の上には、人工の明かりはありません。それはつまり、月明かりも何も無い、真の暗闇が弟子達を覆った、ということなのです。皆さんは本当の暗闇を体験したことがあるでしょうか。本当の暗闇は上も下も分からない、なんだかふわふわしたような、自分の存在がものすごく不安定で、不安で、頼りないものを感じるものです。どちらに向かえばいいのかわからない、どうしたらいいのかわからない、一番頼りになり、すぐることができる人も今ここにはいない。弟子達はまさに、外側も内側も真っ暗で不安な状態にあったのでした。

ここで、もう一カ所、聖書を開いていただきたいと思えます。旧約聖書の一番最初、創世記第一章です。天地創造の初めの第二節によると、「地は混沌であつて、闇が深淵のおもてにあり、神

の霊が水のおもてを動いていた」とあります。ここで「神の霊」というのは「ものすごい突風」という意味です。大地を、ものすごい風が吹き荒れているのです。そして私たちを本当の暗闇が覆っている。聖書において、水は不安定と不吉の象徴です。その上を嵐が吹き荒れているのです。小舟に乗っている弟子達の姿にそっくりではないでしょうか。そしてそれが、この世を生きていく私たちの姿でもあります。その世界に神がいらっしゃって、仰るのです「光あれ」と。私たちの世界を照らし、ゆくべき方を示してくださいさるのです。そうしてこの世界が立ち現れてきます。

小舟に乗った弟子達にも同じ事が起こります。大荒れの水の上、突風が吹き荒れる中、そこに、水の上を歩いて近づいてくる人がいたのです。弟子達はびっくりしました。それはそうでしょう。真つ暗闇の中を、誰だか分からない人が水の上を歩いてくるのです。弟子達は恐れた、と書いてあります。でもそれは幽霊ではありませんでした。主イエス・キリストが、弟子達の所へまっすぐに来られたのです。

イエスは弟子達に、「わたしだ。恐れることはない」と言います。「エゴ・エイミ」という言葉です。「わたしだ」という言い方は、たとえばインターホンが鳴って、誰だろう？と不安に思っていると、家族が「わたしだよ」と言う、そういう言い方に近いものです。「わたしだ、わたしはすぐそばにいる、今見えていないかもしれないけれど、たしかにそこにいて、あなたに呼びかけている」と

いう、とても親しい呼びかけです。

「わたしだ」という呼びかけを受けた弟子達は、「イエスを迎え入れようとした」と書いてあり、そしてその後、何事もなかったかのように、舟は目指す地に辿り着いたと聖書には書いてあります。聖書を読んでいると、たまに「あれ？さつきまでのあれはどうなったの？」というような疑問が浮かぶことがあります。ここもそうです。イエスが弟子達に合流したのは良いとして、さつきまでの嵐は一体どこにいったのでしょうか。嵐の中をどのようにしてこの小舟は切り抜けたのでしょうか。聖書にはそのことが書いてありません。あたかも、そんなことはどうでもいいことだ、と言わんばかりです。この物語では、嵐がどうなったのかが問題なのではないのです。弟子達が、「私だ、イエスだ」という呼びかけに答えて、イエスを迎え入れ、心を開いてイエスを自分のところに迎え入れた、ということが重要なのです。聖書では主イエスは、「光」として語られます。まことの光である主イエスが来られたとき、嵐が吹き荒れる暗闇の中でも、舟は目的地に無事に着くことができたのです。

ヨハネによる福音書の第一章には、次のように記されています。「言葉のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」。ここで言われている光は、主イエスのことです。まことの光であられる主イエスが来られ、嵐の湖に光が差したのです。この光に導かれ、

守られて、弟子達は無事に目的地に着いたのです。

私たちもまた、暗い嵐の湖のような中を進んでいるような時があります。自分が一体どこにむかっているのか分からない。果たして、目的地に向かっているのかどうか。そもそも、目的地はどこなのかさえ分からないような、そんな暗闇を経験することもあります。けれども、主イエス・キリストという、まことの光を私たちのうちに迎え入れ、そしてその光に照らされ導かれて歩むなら、つまずくことなく、安全に目的地まで行くことができます。

今日歌った讚美歌（326番）には「光に歩めよ」とあります。私たちは、まことの光であるキリストを心に迎え入れ、またキリストと共に、キリストにならって、私たち自身も光となるように、歩んでいきましよう。

オー・ハッピー・デイ!

大学宗教授主任 北 博

ペトロの手紙一 一章八〜九節

8 あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。9 それは、あなたがたが信仰の實りとして魂の救いを受けているからです。

ペトロの手紙一 二章二四〜二五節

24 そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになつた傷によって、あなたがたはいやされました。25 あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻つて来たのです。

最近、キリスト教の教えにはどうも本質的に意志的なものが多く含まれているのではないか、と思うことがあります。例えば聖書で語られる「信仰、希望、愛」がそうです。聖書で語られる愛は、決して誰かが自分に好意的だから愛するとか、何となく感じのいい人だから愛するとかではないでしょう。逆に「汝の敵を愛せよ」といった逆説的とも取れる厳しい教えも語られます。信仰についても、誰かが信頼に値する人柄だから信じてみよう、というのとは少し違うように思います。言わば、何か弁証的な激しさを含んだ一貫した精神のあり方とも言えます。希望について言えば、例えば予測によると見通しが明るそうだから希望が持てるのかといったことではなくて、むしろ絶望的な状況に立ち向かって行く中で語られる言葉ではないかと思えます。かつて世界教会協議会のある会議で希望について、「キリスト者の希望とはあらゆる運命論に対する抵抗運動である」と宣言されたことがありますが、やはりこれも世間一般に用いられる意味とはかなり違います。

つまり、通常の会話でこれらの言葉が出て来る場合、一般的に意味するのは「反応」としての心の動き、他者や外部からの何らかの刺戟に対して受動的に向かう心の方向性なのですが、聖書の言う「信仰、希望、愛」とはその逆で、他者や外部に対する一貫した姿勢、ある精神のありよ

うに貫かれたものなのではないかと考えています。

同じように、聖書の言う「喜び」も、外部から入ってきた何か心地よいこと、例えば人に褒められたとか日が差してそよ風が心地よいとかいったことに対する「反応」としての喜びではなく、苦しいこと悲しいことの多々ある人生を根底から支え、様々な困難に立ち向かって行く勇氣を与える、ある確信に根差した「喜び」なのではないかと思えます。

もちろん、それでも悲しいこともあります。また、腹立たしく思うことも日常生活の中では多々あります。私は別に、それらを乗り越える強靱な精神力について語っているわけではありません。実は後で申し上げますが、私は今日、あることで深い悲しみの中にあります。それ自体は、どうしようもありませんし、別に隠すべきものでも否定すべきものでもないと思っっています。今日私が申し上げようとしているのは、そのような悲しみや苦しみの支えとなる喜びについてです。

本日御一緒に賛美しました『讚美歌』五一六番の原詩の作詞者は、フィリップ・ドッドリッジという十八世紀前半に生きた人です。皆さんが目にしてる日本語の歌詞はかなりの意識で、特に折り返し部分の「きみにむつぶこの日ぞ嬉しき、うれしきこの日や」はあまり原詩の意図を忠実に伝えているとは言い難いので、以下この部分を直訳してみます。

—イエスが私の罪を洗い去った幸せな日、幸せな日。彼（イエス）は私に、よく見て祈り、日々喜んで生きることを教えてくれた。イエスが私の罪を洗い去った幸せな日、幸せな日。

『讚美歌』五二六番の他に、『聖歌』二三一番にも同じ賛美歌が収録されていますが、『聖歌』の方が原詩により忠実な訳詞になっています。参考のため、この訳詞のうち一節と折り返しの部分だけお知らせしておきます。

—うれしきこの日よころをさだめて「すくいのみみよ」とみ子をばあおぎぬ

うれしうれしこの日ぞうれしきイエスキこの身をすくわせたまえり

うれしうれしこの日ぞうれしき

こうして改めて歌詞を読んでもみると、この賛美歌は洗礼式の際にみんなで賛美してもいいんじゃないかという気がします。

ところでその後二十世紀後半になって、エドウィン・ホーキンスという人物がこの賛美歌の折り返し部分に別のメロディーを付けて歌ったところ、大ヒットしました。これがゴスペルの名曲「オー・ハッピー・デイ」です。かなり前に聞いた話ですが、歌手の白鳥英美子さんが「アメイジング・グレイス」を聴いて感動し、ある人にこの歌を歌いたいと打ち明けたところ、その人は「この歌の歌詞には非常に重い意味が含まれているので、この歌を歌うには相当な覚悟が必要だ」と

注意を促したそうです。

その意味では、「オー・ハッピー・デイ」の内容もやはり相当重いですね。「今日は天気だ、気分は爽やか、幸せな日だ」と言っているわけでは決してなく、「イエス・キリストによって贖われ、罪が洗い去られたから幸せな日だ」と言っているわけです。この歌詞の背後にどのような人生のドラマがあったのだろうと想像すると、気軽に歌えなくなりそうです。

本日の聖書の個所に即して言うならば、「イエス・キリストが私の罪のために十字架を背負ってください」のために、私は罪赦され生きることができるようになった。だから喜びに満ち溢れている」ということです。そしてそれが、「オー・ハッピー・デイ」で歌われている喜びでもあるのです。先程も申しましたが、それでも悲しい時は悲しいのです。それは気持ちを押し殺したり、そのことで自分を責めたりするような性質のことでもないと思います。今日私が取り上げた聖書の個所で言っている「喜び」とは、むしろそのような様々な感情を受け止め、慰め、癒して、力づけてくれる喜び、つまり生きる力の源、生きるという営みの根底となるような喜びです。

実は今日（十一月十四日）、私は動物病院から電話を受け、点滴を受けていた十一歳五カ月になる愛犬のさくらの容体が急変し、亡くなったという知らせを受けました。私はつい先程動物病院に駆けつけてさくらの死を見届け、遺体を自宅に連れて帰り、それからこちら（泉男子寄宿舎）

に向かいました。この悲しみを乗り越えられるという自信はあまりありません。私はそれほど意志強固なタイプの人間ではないのです。でも、これも含めてすべて主のご計画のうちにあることを思い、悲しみを受け入れ、ゆっくりと歩きながら生きて行こうと思っております。

サンタクロースのプレゼント

大学宗教授任 鐸 木 道 剛

ローマの使徒への手紙 第十四章八節

8 わたしたちは、生きる^いとすれば主^{しゅ}のために生き、死ぬ^しとすれば主^{しゅ}のために死ぬ^しのです。
従^{したが}って、生きる^いにしても、死ぬ^しにしても、わたしたちは主^{しゅ}のものです。

クリスマスのシーズンとなりました。昔、ディケンズの『クリスマス・キャロル』の映画を見て、とても感動したことがあります。クリスマス・キャロルの映画はたくさんありますが、一九八〇年頃のアルベルト・フィニーがスクリーンを演じた『スクリーン』という題の映画です。とても貧しいクラチット家の末の男の子、足の悪いティムが歌います。「この美しい冬の朝に、ぼくの願いがかなうなら、夢見た国は、今ここに実現するだろう」(In this beautiful winter morning, if my wish could come true somehow, then the beautiful day that I dream about would

be here and now) 」という歌です。『クリスマス・キャロル』は、ケチなスクールジが最後に改心して、ティムを初めとして多くの人にプレゼントと寄付をする話です。

ぼくの家庭でも子供にはサンタクロースを信じるようにしてきました。娘がまだ幼いとき、サ
ンタさんからのプレゼントなにか欲しい?と聞くと、「そり」というんですね。「そり?」とは
思いましたが、幼稚園の遠足で雪のあるところに行ったらいいのです。それで「そり」、プラス
チック製の「そり」です。それを隠れて買ってきて、夜中にそおっと枕もとに置いたのですが、
娘はそれを察して起きていたのか、見つかってしまいました。「いや、玄関でサンタさんにかっ
たので、預かって来たんだ」とか苦しい言い訳をしましたが、どうもバレたみたい。その後も
ずっと「サンタさんはいるんだ」と言い続けていたら、どうも子供は外で、「うちでサンタを信
じているのはお父さんだけ」という状況になっていたらしいのです。

またぼく自身の子供のときの思い出もあります。教会で毎年使うサンタクロースのお面がとて
も不気味なお面だったのです。今、そのお面はもう教会にはありません。聖劇をしたり手品をし
たりで楽しんだあと、とうとうサンタさんが来るといので、みんなでサンタさんを迎える歌を
歌いましょうとなります。それが短調の怖い歌なのです。「ゆきよふれふれふりつもれ、ゆきよ
ふれふれふりつもれ、さんたくろーすのおじいさんが……」という歌です。だんだん不安な気分

になってきます。そして教会の正面の大きな木の扉が外からドンドンと強くノックされます。子供たちの恐怖は頂点に達します。そして不気味なお面のサンタさんの登場。左右に挨拶しながら聖堂奥まで歩いていくのですが、泣き出す子供もいます。ぼくも子供るとき「お父ちゃん」と泣いたらしいです。そしてその年のサンタさんは父がサンタさんになっていたとのこと。今となっては笑い話ですが、貴重な幼児体験でした。

というのは、サンタクロースを信じるのは、ファンタジーのためであって、それは子供の感受性で、つまり社会生活を営むには不要な感受性です。しかしそれを忘れてはロボットのような乾涸びた人間になってしまいます。子供の感受性は忘れてはならないのです。しかしそれはあくまで大人としてです。子供の世界とは恐怖に満ちています。肖像画を怖がる、単なる絵なのに怖いといえます。これはぼくの研究テーマの偶像論なのですが、子供は恐怖に満ちています。シュールレアリズムとは、そういう子供の感受性を大人が楽しむことです。アンドレ・ブルトンがそう言っています（『シュールレアリズム宣言』一九二四年）。いや芸術そのものが子供の感受性を忘れては成り立ちません。聖書にもいいます。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マタイ伝十九章十四節、マルコ伝十章十五節、ルカ伝十八章十七節）。しかしまた「かつては幼子のように考えていた、しかし成人した今、幼子のこ

とを棄てた」(コリント前書十三章十一節)ともいいます。子供の感受性は大切ですが、しかし子供のままではないことに注意です。

それからもうひとつサンタクロースが重要である理由があります。これはサンタクロースの起源に関わります。クリスマスにプレゼントをする習慣です。貧しい人々へのプレゼントは、サンタクロースの名前である聖ニコラの逸話からあります。聖ニコラは、プレゼントしたのが誰か、わからないように、プレゼントは家の窓から投げ込んで行ったらしいです。サンタクロースのプレゼントの習慣はそこからきています。実際は親が準備するのだけれど、サンタクロースが準備したことにする。サンタクロースという存在を信じるファンタジーを育てることに加えて、誰かわからない人からのプレゼント、「足ながおじさん」の話もそうです、そういう観念を知ることが大切です。誰かわからない人からの恵み。これは神さまの果てしない恵みに他なりません。

現実生活のなかでの人からの贈与は、負い目を負うことになります。ギブアンドテイクといいます。ぼくの嫌いな言葉です。ギブアンドテイクの関係に本当の愛はありません。神さまの恵みは違います。神さまの恵みは果てしなく、一方通行です。それを我々も知らねばなりません。

プレゼントは本来、貧しい人へのプレゼントです。「貧しい人のためにしたことは、私にした

ことだ」とイエスも言われました（マタイ伝二十五章四十五節）。クリスマス・キャロルの話では、タイムのためです。豪華な商戦で消費をかき立てられて、自分のために、あるいは自分の恋人のために贅沢することは全くクリスマスの喜びではありません。しかしこのごろ、「自分へのご褒美」ということばがあります。ちよつと贅沢をするときに使います。しかしこれは言い訳です。後ろめたさを隠蔽する言い訳です。

今度土樋の礼拝堂のステンドグラスの修復にお金を使うことが決まりましたが、これにはたくさんのお金が必要です。それだけのお金があれば、たくさんのお金が必要な人々を助けることができるでしょう。ステンドグラス修復が自己目的すれば、それは偶像崇拜です。しかしステンドグラスの修復は東北学院のためではありません。東北学院が自己目的化すれば、それは偶像化です。偶像とはこのことです。有限なこと、有限なものが自己目的となれば、それはすべて偶像になります。すべては「神のよりおおきな栄光のため（ad majorem Dei gloriam）」です。「我々は生きるも死ぬも主のためである」とのパウロの言葉（ローマ人への手紙十四章八節）を思い出しましょう。

サマリヤ人、マジパネエ!

大学宗教授 原田浩司

ルカによる福音書 一〇章二五〜三七節

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、「律法には何と書かれているか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32同じように、レビ人もその

場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。』36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

「お客様の中で、どなたかお医者様はいらっしゃいませんか?」。航空機や新幹線、フェリーなどでの移動中に乗客が体調を崩し、スタツフだけではとても対応ができないような状況の中で専門の医師の助けを呼ぶ「ドクター・コール」です。学生の皆さんにとってはTVドラマの中で、たまに見るようなものかもしれませんが。私がかつて大阪に住んでいた時のことですが、東京へ新幹線で移動していた時に、私は客車の後方の席で本を読みながら座っていたのですが、何やら周

困がザワザワしている空気に気づき、顔を上げて前方を見ると、車掌や新幹線のスタッフが慌ただしく動いている姿を見えました。他の乗客同士の話が耳に入ってきたのですが、前列に座っている高齢者が口から泡を吹いて意識を失っていたそうです。すると新幹線のアナウンスが聞こえてきて、新幹線は停車予定のない静岡の掛川駅に急ぎよ停車し、体調不良のお客を降ろして病院に搬送するため、乗客の皆様にはご迷惑をおかけしますがご協力をお願いします、といった内容だったと記憶しています。こうして、お客は降ろされて病院に搬送されていきました。この時「ドクター・コール」はありませんでしたが、新幹線のように急ぎよ途中下車できる対応が取れる状況ならいざ知らず、飛行機やフェリーなど、空や海での移動中はそう簡単に途中下車できません。そういう時に、乗り合わせた乗客の中に医者がいないか確認し、いたら乗客を助けて頂きたいという状況は、学生の皆さんも「分かる」と思います。

カナダやアメリカでは、それぞれの州が独自に定めた「州法」の中に、このような移動中に遭遇した突然の事態に、医師や専門家が積極的に手助けして、人命救助を奨励する法律があります。それは「Good Samaritan laws (よいサマリア人法)」と呼ばれ、人命救助に加担した際に、専門家がもし人命救助ができなかった場合でも起訴はされず、医師や専門家としての身分が保証されています。この法律の名前「Good Samaritan」は、今日読んだルカによる福音書一〇章二五

三七節でイエス・キリストが語られた「よいサマリア人」に由来するのは明らかです。この物語を、もう一度改めて確認します。

ここにエリコという町に向かう旅の途中で、不運にも強盗に遭遇し、半殺しにされて道端に打ち捨てられて横たわる一人のユダヤ人が登場します。するとそこに一人の祭司が通りかかりましたが、彼は一瞥して、横たわる人を避けて通り過ぎていきました。またそこに二人目となるレビ人が通りかかりました。この人も、一瞥すると無視して、通り過ぎて行ってしまった。今度は三人目にサマリア人が通りかかりました。サマリア人というのはユダヤ人の近隣地域に暮らす民族で、隣接しているからこそ、かねてから衝突やら対立やら、両者の間には緊張状態があり、歴史的に互いに相手のことを快く思っていない関係です。今日の東アジアの国同士の関係と重ね合わせて考えるとイメージが付きやすいかもしれません。そういう状況にあるサマリア人が、怪我を負って横たわるユダヤ人の脇を通りかかりました。この時、このサマリア人がとった行動は、民族的な対立関係を棚上げし、今日の前で傷つき、苦しみ、喘いで横たわる一人に目を向け、その人を介抱したのです。そうすることで何か自分に特になること、益になるようなことはありませんが、逆に身銭を切っても、このけが人を癒そうとした。この三人目に登場したサマリア人の精神を今日に積極的に活かしていこうというのが、先ほど紹介した「Good Samaritan laws (よ

「いサマリア人法」の基本精神だと思います。

さて、私たちが生活するこの日本ではどうでしょうか。少し気になってインターネットで調べてみましたが、ある記事が見つかりました。それは東日本大震災の後の、2011年5月31日（火）付けの茨城新聞に掲載されたものだとあり、「業務外の救命措置で消防指令停職6カ月 石岡市」という見出しで、その内容は「救急救命士の資格を持つ消防司令がプライベートで遭遇した交通事故の際に救急処置を行ったが、「関連法規に抵触する可能性がある」として停職6ヶ月の処分を受けた」というものです。もし皆さんが救急救命士の資格を持っていて、旅先や移動中に丁度目の前で事故の現場に遭遇し、怪我人がいる状況だったら、どうしますか？記事のとおりでしたら、この人は「プライベート」ですから、自分の判断で怪我人に応急処置をしたわけです。いわば「Good Samaritan laws（よいサマリア人法）」が推奨する、ふさわしい行為です。しかし、この人はその事のゆえに「停職6か月」という重たい処分を科せられてしまったというのです。この新聞記事は、読者に問題を提起しています。「これが日本の現実だ」と。「しかし、これは正しいのか、間違っているのか」と。学生の皆さんも考えてみて欲しいと思います。

よいサマリア人の譬え話を語られた後で、イエス・キリストは質問してきた律法の専門家に「行って、あなたも同じようにしなさい。」と言われました。皆さんは、医師でもなければ、救急救命士

の資格を持っているわけでもありませんから、仮に現場に遭遇しても、病人や怪我人に、何かしら積極的に手を差し出すという状況にはならないかもしれません。しかし、「同じようにする」ということの重要なポイントに、怪我を負い、苦しみ、喘いでいる人に、サマリア人が目を向け、関心を注いだ点にあります。最初に通りかかった祭司、そして次に通りかかったレビ人に共通するのは、この怪我人を一瞥した後、無視して、そのまま立ち去ったことです。まったくの「無関心」だったのです。他方、サマリア人はこの怪我人に「大丈夫かな」と関心をもち、大丈夫そうじゃないのが分かると、彼は怪我人を心配し、一所懸命に介抱しました。最初の祭司、レビ人と、サマリア人とを分けるのが「無関心」です。

ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサの言葉でよく知られているものに「愛の反対は、憎しみではなく、無関心である」という言葉があります。愛の反対が無関心であるなら、無関心の反対は何かというと、関心です。関心を寄せる、関心を持つ、関心を注ぐ。実はそれこそ「愛」につながっていることを、マザー・テレサの言葉は私たちに伝えていきます。

互いが互いに無関心になり、昔ながらのコミュニティ（共同体）が消えつつある現代社会の中で、これからの社会を作っていくのは若い皆さんたちです。急病人の人命を救いましょうとか、そういう大きな（マジパネエ）ことを皆さんにして欲しいなど言うつもりは全くありません。そうで

はなく、小さなことでもいい、他者へ、隣人への関心を持つことを忘れて欲しくないという点です。特に、痛み、苦しみ、弱さを覚えている人に対する関心の眼差し。そこに聖書が伝える、イエス・キリストが教える「隣人愛」の精神があります。何も大それた（マジパネエ）ことをしなくていい。小さな関心と労りから愛は広がっていきます。

私が暁の翼を駆って、海の果てに住んでも

大学宗教主任

藤原佐和子

詩編 一三九篇一〜一〇節

1 主よ、あなたはわたしを究め

わたしを知っておられる。

2 座るのも立つのも知り

遠くからわたしの計らいを悟っておられる。

3 歩くのも伏すのも見分け

わたしの道にことごとく通じておられる。

4 わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに

主よ、あなたはすべてを知っておられる。

5 前から後ろからもわたしを囲み

御手をわたしの上に置いていてくださる。

6 その驚くべき知識はわたしを超え
あまりにも高くて到達できない。

7 どこに行けば

あなたの霊から離れることができよう。

どこに逃れば、御顔を避けることができよう。

8 天に登ろうとも、あなたはそこにいまし

陰府に身を横たえようとも

見よ、あなたはそこにいます。

9 曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも

10 あなたはそこにもいまし

御手をもってわたしを導き

右の御手をもってわたしをとらえてくださる。

この春、京都の大学からまいりました藤原佐和子と申します。神学研究をやっております、このたび文学部総合人文学科の教員として、宗教部のメンバーとして迎え入れて頂きましたこと、ほんとうに感謝に思っております。

ちょうど一ヶ月前に仙台に引越してきた時は、やっぱり「寒いなあ」と思いました。京都弁で言うところの「さっふいさっふい」という感じです。ですが、先週あたりから至るところで、色とりどりの花や桜が咲き始めました。今週にはいよいよ、春っぽい気持ちになってきましたし、街行く人々の服装だって、どんどん春らしい感じになってきていると思います。

私の研究室から大きな木が見えるのですが、この礼拝堂の前の桜は満開だというのに、いつまでも葉っぱがなくて枯れ木のようなでした。最近になって、やっと新芽が芽吹いてきているのを見つけて嬉しくなりました。植物というのは、ちゃんと「春が来る」というのを分かっているし、ちゃんと春が来るのを分かるように、神様が作っていてくれている、準備しておられるのだな、ということが分かる気があるからです。

さて、春というのは、「始まり」の季節であります。泉キャンパスは新入生でいっぱいですし、住み慣れたご実家を離れて、新生活を始められた方もおられることと思います。二回生の方でしたら大学生生活にも慣れてこられて、これからどのようなことを専門的に学んでいくのかの模索に、

いよいよ本腰を入れて取り組まれる時であるかと思えます。

ですが、「始まり」というのは、常に何かの「終わり」でもあるのではないでしょうか。例えば、これまでの高校生活の終わり、地元での暮らしの終わり、そして、数年後には、泉キャンパスでの学生生活の終わり。さらにその先には、大学生でいるということそのものの「終わり」を予感する春でもあるのではないかと思えます。

私にしましても、長いこと住んできた関西での生活が「終わり」を迎えました。今、心の底から関西弁が恋しくて、電話しまくっています。「お兄ちゃんの頭の毛な、三本がパーッとなんねんで」というCMにさえ癒されるかのようです。ですが、それでも尚、一つの「終わり」とは新しい「始まり」、新しく変わっていくこと、変えられていくことのチャンスであると思うのです。

今日は私の初めての礼拝担当ですから、どんな聖書箇所を選ぼうかなと考えました。そこで、私の一番お気に入りの箇所の一つ、ワン・オブ・ザ・ベストをご紹介しますことにいたしました。先ほどお読みしました詩編一九三篇は、私が大学受験を終えて、高校を卒業する頃に選んで、それ以来ずっと大切にしているものです。

私は高校卒業後、東京のキリスト教主義大学に行きました。一回生のときは、ここでいう泉キャンパスのような、いや、もっと遠い郊外の山の上にあるキャンパスに行かなければなりません

した。高校生活とはだいぶ違います。それから大学生になったら、煩わしい校則からリリースされて自由になるという「良いこと」のある一方で、ホームルームはありませんし、担任の先生もいませんし、「色々と違うんだなあ」ということが分かってきます。自分から動かないと、友達もできないし、情報も手に入らないし、なんにも起こらない、面白くない、ということに気づきました。当時はまだ実家暮らしでしたが、通学に片道二時間かかりましたので、距離的にも心理的にも、自分のかつての生活から大きく、遠く、「離れてしまった」と思いました。

私は高校三年生のときに、良性腫瘍をとる手術したことがあるのですが、術後、何回かは、父や母が高校に車で迎えに来て、早退して、大きな病院での診察に付き添ってくれました。でも今や、何かの時に家族にすぐに駆けつけてもらえる距離ではないのです。これまで見守ってくれていた先生たちもいません。なんだか、かつての生活からポーンと放り出されて、まるで追放されてしまったかのような気分を数ヶ月間、抱えたまま過ごしました。

ですが、そんなときに私はふと、「実は今まで、自分は守られてきたんだ」ということに気づきました。それも、いろんな人たちを通して。それも、私が気づいているところでも、気づいていないところでも。私は、私たちは、ほんとうは守られてきた。そんな風に思えるようになってから、実は、何か一つのことを「終わり」を迎えて、なんだか自分一人が追放されてしまったよう

に感じる時があるけれども、また自分から動いていければ、いろんなことにアプローチしていけば、世界がどんどん回りだすということも次第に分かるようになっていきました。

一番遠いところでは、タイ北部のチェンマイという古い街に住んでいたことがあります。最初の頃は、標準タイ語も片言レベル、現地のチェンマイ語もよく分かりませんし、正にポツーンという感じですよ。でもそこでだって、新しい出会いがたくさん与えられました。きっと「終わり」と「始まり」はセットになっていて、変化していく、変わっていくということが、日々、新しい私たちを作っていくのだと、神様が日々、私たちの前に道を作っていて下さるのだと私は思います。詩編一三九篇が私たちに伝えようとしているのは、私たちがどこに行っても、ものすごく遠く離れたところに行つたとしても「神様の手の中や」ということだと思えます。決して忘れられたり、置いてけぼりにされたり、無視されたりはしないのです。私はかつて「神様は私のことを忘れちゃつたのかな」と思つたこともありましたが、実は、正にその時、私がようやく神様を思い出したのであつて、本当はずつと、「神様の手の中」にいたのだと思います。

「終わり」と「始まり」はセットかも、ということとは、言い換えれば、「追放」と感じられるようなことだつて常に「祝福」とセットなのではないかということになります。創造物語で人間が神様を裏切つてしまったとき、神様はめっちゃめっちゃ怒つて、二人をエデンの園から「追放」しま

す。二人は知識を得てしまったので、それまで裸でいても平気だったのに、それを恥ずかしいと思うようになっていました。神様は、怒りまくって二人を「追放」するのですが……。ここがほつこりするところなのですが、動物の皮で衣を作って二人に着せてあげるので。聖書には、そういう物語があります。やはり、追放が祝福で、祝福は追放なのかもしれません。

もしかしたら皆さんもいつか学生生活を終えたあとで、実は大学でも友達や、サークルの仲間や、教職員の人たちなどから大切に守られてきたのかもしれないと感じるようになるかもしれません。しかし、それでもまた必ず、新たな導き手や仲間が与えられていきます。

オルガニストの坂上先生に「わがゆく道、いついかになるべきかはつゆ知らねど、主は御心なしたまわん」という讚美歌を演奏して頂きました。私たちがどこに行っても、たとえ故郷から遠く離れても、神様はずっといたはるし、むしろその祝福から逃れることはできない。この先、どこでどのように生きていっても、きつとだいじょうぶなのだと思えます。祝福は、いつまでも私たちを追います。なぜなら、神様の祝福の外で生きるということは、きつと不可能だからです。

命の水

大学宗教授主任 吉田新

ヨハネによる福音書 第四章七〜十五節

7 サマリアの女おんなが水みずをくみに来た。イエスは、「水みずを飲のませてください」と言いわれた。8 弟子でしたちは食たべ物ものを買かうために町まちに行いっていた。9 すると、サマリアの女おんなは、「ユダヤ人いじんのあなたがサマリアの女おんなのわたしに、どうして水みずを飲のませてほしいと頼たのむのですか」と言いった。ユダヤ人いじんはサマリア人いじんとは交際こうさいしないからである。10 イエスは答こたえて言いわれた。「もしあなたが、神かみの賜物たまものを知しっており、また、『水みずを飲のませてください』と言いったのがだれであるか知しっていたならば、あなたの方ほうからその人ひとに頼たのみ、その人ひとはあなたに生いきた水みずを与あたえたことであろう。」11 女おんなは言いった。「主しゅよ、あなたはくむ物ものをお持もちでないし、井戸いどは深ふかいのです。どこからその生いきた水みずを手にお入いれになるのですか。12 あなたは、わたしたちの父ちちヤコブよりも偉えらいのですか。ヤコブがこの井戸いどをわたしたちに与あたえ、彼かれ自身じしんも、その子こ供どもや家畜かちくも、この井戸いどから水みずを飲のんだのです。」13 イエスは答こたえて言いわれた。「この水みずを飲のむ者ものはだれで

もまた渴く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。15 女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」このイエスのみ言葉を理解するために、わたしたちは「水とは何か」について学ぶことから始めたいと思います。わたしたちの体は水でできていると言われます。実際、人間の体は六〇%が水で構成されています。もう少し詳しく説明しますと、体を構成する一つ一つの細胞、この細胞はタンパク質、核酸、糖質などの分子などで構成されていますが、それらをつなぎ合わせているのが水です。ですから、水がなければ人間の体はその根本から成り立ちません。しかし、日常生活における水の大切さを知っている人は、どれほどいるでしょうか。

ここに一杯の水があるとします。たとえば、食事をしている時にこの水をテーブルの上や床にこぼした時、皆さんはどのように思われるでしょうか。多くの方は「テーブルクロスや絨毯など

が濡れてしまい困った」と思うでしょう。しかし、「水がこぼれてしまってもったいない」と思う方はどれほどいるでしょうか。日本に生きるわたしたちは、日々の生活のなかで大量の水を使っています。しかし、このような安全な水を飲める人は、世界のなかでごく少数であることはあまり意識されていません。

中近東では川の水は雑菌が混在しており危険なため、人々は経験的に湧水か地下水に依存してきた歴史があります。本日の聖書の箇所にありますように、わずかな井戸水に人々は集まります。わたしたちが生きている地球は水の惑星といわれていますが、飲み水として利用できる水はどのくらいあるのかご存じでしょうか。地球上の水は九八%が海水です。淡水はわずか二%にすぎません。その大部分は南極や北極の氷山ですから、わたしたちが利用できる水は、全体の〇、〇一%にも満たないのです。地球上の水のすべてが、風呂桶一杯の水だったとしますと、わたしたちが使える水はその風呂桶に落ちるわずか一滴です。この一滴の水を、人間を含むすべての陸上生物が分かち合って生きているのです。さらに人間が飲める飲料水となるとどのくらいの量になりますでしょうか。

生きるために水はなくてはならないものでありながら、その量は実はごくわずかである。この水の貴重さをわたしたちはどれほど知っているでしょうか。そのことをよく理解させないと、本日、

お読みしたみ言葉の真意は分からないと思います。イエス様から水を頂いた、という程度の話ではありません。貴重な水のなかでもさらに貴重な水を頂くと、という話なのです。おそらく、水不足が深刻な地域に生きる人は、豊かな水があふれる日本に生きる人とは別な視点で、この箇所を読むと思われます。

イエスとサマリア人の女性は、水に関する対話を持ちます。そこで、イエスは命を保つための水よりも、もっと大切な水があると述べます。普通の水は飲めば再び乾きます。わたしたちは絶えず、水を飲み続けなくてはなりません。いつも何かに飢え、渇き、水を探し続け、水を飲んで、もまた乾く存在です。生きている間、渇きは満たされることはないのです。

しかし、永遠に乾くことのない水があるとイエスは教えます。イエスが与える水は、与えられた人のなかでたえずわき出る泉となります。それはどのような水なのか。永遠の命に至る水です。永遠の命とは何でしょうか。それは、わたしたちの魂を癒し、生きることを励まし、困難なときでも支えてくださる命の水です。では、この水をどのように得ることはできるのでしょうか。

実はこの水を得られるように、いつもイエスはわたしたちに語りかけています。この聖書の箇所を注意深く読みますと、サマリアの女性は自分から水を求めたではありません。イエスが女

性に「水を飲ませてくれるか」と声をかけたのです。わたしたちは実は受け身の存在です。

皆さんは渴いていないでしょうか。いま、自分の渴きを満たしてくるものを求めても、すぐに渴きを覚えないでしょうか。あなたを本当に満たし、うるおしてくれるものはありますか。

心の片隅に覚えていただきたいと思えます。あなたの目の前には、命の水が置かれています。

キリストの体として互いに豊かに生きる

総合人文学科長 出村 みや子

コリントの信徒への手紙一 第二二章二二～二六節

12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。14 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。15 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょう。16 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょう。17 もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。18 そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたので

す。19 すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。20 だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。21 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かつて、「お前は要らない」とも言えません。22 それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分がある、かえって必要なのです。23 わたしたちは、体の中でほかよりも格好が悪いと思われる部分を覆って、もつと格好よくしようとし、見苦しい部分をもつと見栄えよくしようとします。24 見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。25 それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。26 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しめ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ばれるのです。

キリスト教は神に対する愛と共に隣人への愛を大切にしており、東北学院大学は「イエス・キリストに倣う隣人への愛の精神を養う」教育を建学の精神としてきました。皆さんは日常生活のさまざまな局面で、家族や学校、サークル活動に所属し、将来は職場や地域社会などの複数の集

団グループに帰属することになります。現代人の悩みの多くは人間関係によると言われますが、グループ内の対立やいじめ、仲間外れといった問題に悩んだことのある学生も少なくないと思います。大学生活は皆さんが今後社会で活躍する前段階ですから、そうした対立や不和を超えてグループをまとめ、良い人間関係を築くための努力をすることは、皆さんの今後の人生にとつて貴重な経験となるにちがいありません。そうした意味で本日選びました聖書の箇所は、使徒パウロがコリントの教会に宛てた手紙の中の一節です。パウロは設立間もないコリントの教会内部に人間的思いによる対立が生じたことに心を痛め、この手紙を送りました。ですからこの箇所から私たちは、共同体の一員として生きる上で有益なメッセージを読み取ることができましょう。

一二節でパウロはまず、「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」と述べています。そしてキリストの体としての教会共同体を有機的にイメージするならば、そこには民族的差別も、身分的差別もありません。皆さんが世界史で学ばれたように、キリスト教が広まった古代地中海世界は奴隷制を基盤とした身分社会であり、社会的地位や階層による差別が人々の生活を縛っていました。なぜ当時の古代の身分制社会の中でパウロがこのような革新的なメッセージを大胆に主張できたのでしょうか。パウロはその根拠を二三節で、洗礼を受けた者たちはキリストにおい

て一つの体となり、キリストにおいて皆平等となるからだと述べています。なぜなら体は様々な機能を持つ多くの部分から成りますが、体としての統一性を保っているように、キリストを信じる者の共同体においては、それぞれ目に見える違いはありながらも、キリストにおいてそうした多様性を互いに尊重し合うことが出来るようにされたからです。

次にパウロが、キリストの体である教会共同体においては、ごく一部の人々の働きだけが重要視されるのではなく、互いに異なる多くの部分がそれぞれに、他には置き換えることが出来ない固有の存在意義を持つっていると述べていることも重要です。一四節をご覧下さい。パウロは「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『私は手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか」と述べ、そして一七節以下で「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか」と非常に興味深い議論を展開しています。パウロは、こうした身体機能の一つ一つにその固有の役割を与えているのが創造主なる神の業であることを人々に伝えており、いわば身体の一つ一つの機能には優劣はなく、そのいずれが欠けてもうまく働くことができないように、キリストの体としての教会を構成する一人一人に神からそのかけがえのない役割や使命が与えられ

ていることを示しているのです。

学生の皆さんがリーダーとしてグループをまとめ、結束させようとする際にぜひ思い起こしていただきたいのが、二一節以下のパウロの言葉です。パウロは、「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」と述べています。私たちは、目が痛くなれば目薬を使ったり、眼科に行ったりして目をいたわります。日頃は意識しませんが、目がうまく機能しない時になって初めて、目が日常生活においてどんなに大切であるかに気付かされますし、足に怪我をしたときになって初めて足の大切さに気付くものです。そのように、もし私たちが様々な集団のなかで、弱く見える人に対して、「あなたは要りません」などと冷たい言葉を発するのではなく、むしろ暖かで思いやりに満ちた言葉を隣人に投げかけるように心がけるならば、そうした人が一人でもいるグループの雰囲気は格段によくなることでしょう。二四節以下でパウロは、「神は、見劣りのする部分をいつそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」と述べて、キリストにある共同体のあるべき姿を描いています。成立当初の小さな教会は、そのような相互

の思いやりと愛に満ちていたことでしょう。

ところで、皆さんはオーストリア出身のユダヤ人心理学者のアルフレッド・アドラーを御存じでしょうか。アドラーが『人生の意味の心理学』という書物の第一章で述べている「共同体感覚」という概念は、パウロが教会共同体をキリストの体としてイメージしていることにつながっているように思いますので、ご紹介したいと思います。

「われわれのまわりには他者がいる。そしてわれわれは他者と結びついて生きている。人間は、個人としては弱く限界があるので、一人では自分の目標を達成することはできない。もしも一人で生き、問題に一人で対処しようとすれば、滅びてしまうだろう。自分自身の生を続けることもできないし、人類の生も続けることはできないだろう。そこで、人は、弱さ、欠点、限界のために、いつも他者と結びついているのである。自分自身の幸福と人類の幸福のために最も貢献するのは共同体感覚である」。

アドラーは自己中心的な現代人の幸福のためには共同体感覚を取り戻すことが必要であると述べていますが、その際の共同体とは、家族や学校、会社等の身近な目に見える現実社会だけではなくありません。アドラーは共同体を、「さしあたって自分が所属する家族、学校、職場、社会、国家、人類というすべてであり、過去、現在、未来のすべての人類、更には生きているものも、生きて

いないものも含めた、この宇宙全体を指している」と定義しています。こうした共同体の理解は、時と空間を越えた宇宙論的広がりを持つパウロの「キリストの体」のイメージとつながっています。

東北学院は今年創立一三〇周年を迎えますが、東北学院が歴史の流れを越えて目指してきたものは何かを考える時に、パウロの言葉が皆さんの今後の人生の歩みを照らす光となることを願っています。

ぶどうの木とその枝のように

経済学部教授 松村尚彦

ヨハネによる福音書 第一四章四〜五節

4 わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。

皆さんは、何処かで「ぶどうの木」を見たことがあるのではないかと思います。「木」とはいつでも、普通の木のように自立して立っている訳ではなく、「つた」のように長い枝が、柵にからみつきながら、四方八方に伸びています。しかしよく見ると、「つた」のような長い枝は、複雑に絡

まり合いながらも、全て地面から生えている1本の太い木に繋がっています。そしてこの木を通して地面からたつぷりと栄養分を受けた枝は、秋になると沢山のブドウの実を実らせませす。

今日の聖書の箇所を読むと、二千年以上前の古代オリエント世界でも、「ぶどうの木」は、やはり今私たちが見ているような姿をしていたということが分かります。私たちにもおなじみのぶどうの木を喩えに使った聖書のこの箇所は、私にとつても親しみ深く読めるので、私が特に好きな聖書の箇所でもあります。ここでイエス様が話された言葉のうち、私が最も大事だと思うのは「つながる」という言葉です。そこで今日は、聖書のこの箇所を材料にしながら、「つながる」ということについて考えてみたいと思います。

「つながる」という言葉の意味は、「切り離されていたもの」が、もう一度結びつくことによって、相互の関係を回復するということです。古代の神話のなかには、この「切り離されたもの」が結びついて再び一つになるという話が沢山あるようです。聖書からは少し離れますが、私が直ぐに思い出すのは、プラトンが書いた本に出てくる、男女の愛に関する話、つまり何故男女はお互いに懂れ、求め合うのかということに関する有名な神話です。

この神話によれば、太古において男女は背中合せて結びついており、2人で1つの体を持っていました。しかし人間があまりにも傲慢なので、神様が人間を2つに切り裂いて男女別々の体にな

してしまった。それが今の人間の姿だと言うのです。このため切り離された人間は、自分の失われたもう一つの半身を求めてさまよい歩くことになった。男は自分の半身である女を、女は自分の半身である男を。そうして自分の半身であった相手を見つけて一つになれた時に、その2人は本来の姿を取り戻して、全き幸福を得ることができる。そのような話です。ここには、大変素朴な形ではありますが、人は一人では幸せになれないこと、そして自分を越えた「相手」とつながることで、はじめて本来の幸せを獲得できるということが表わされています。

しかし人は一人では幸せになるのが難しいとしても、人と関わることは、喜びをもたらす事ばかりではありません。反対に辛い思いをすることもしばしばあるでしょう。話は現代に戻りますが、アドラーという心理学者は「人間の悩みは全て対人関係の悩みである」「そして人間の幸福もまた、全て対人関係の幸福である」と言っているそうです。そのアドラーについての本を最近読みましたので、ついでにアドラーが今日のテーマである「つながり」について何と言っているか短く紹介してみましよう。

アドラーによれば、私たちは人生の大半の時期を「自分」を中心に過ごしています。すなわち、生まれてからこの方、「自分」の目で世界を見て、「自分」の耳で音を聞き、そのなかで自分の世界観を形成しながら、「自分」の幸せを求めて人生を歩んでいるのです。しかし人生のパートナー

と出会い、本当の愛を知った時には、その人の人生は根本的に変わります。アドラーは、そのことについて「人生の主語が変わる」という面白い表現をしています。つまり、それまでの「自分」という人生の主語が変わって「わたしたち」となり、自分一人にとつての人生の課題が、二人にとつて共通の課題へと変えられていくというのです。そしてこのような「本当の愛」を経験することは、「自分」からの解放、「自己中心性」からの解放をもたらし、人間が本来持つ全き幸福を実現することにつながる、とアドラーは述べています。

さて聖書の箇所に戻りましょう。今日の聖書の箇所ではイエス様は、私たちに對して、「ぶどうの木」と「その枝」がつながっているように、イエス様につながっていなさいと言われました。それはぶどうの枝が、その木から栄養たつぶりの樹液を受取るように、私たちもイエス様につながっていることで、イエス様が持つ「命の力」が、私たちの体に注ぎ込まれ、私たちの魂を養い導いて下さるということを比喩的に述べたものです。ここにはプラトンやアドラーとの共通点を見て取ることができます。つまり自分を越えた「相手」とつながることで、人間は本来の幸福を獲得できるということです。しかし相違点もあります。それはつながる「相手」が人間ではなく、神様だということです。

神様は、本当の愛の神様です。いつでも私たち一人一人を愛してくださっています。このため

私たちが「つながっていない」と思う時でも、イエス様の方でつながっていてくださる。そのことに気づき、感謝し続ける人生を歩みたいと思います。

お祈りします。

天の父なる神様。今日は、ぶどうの木とその枝のように、イエス様が私たちにつながっておられることを学びました。私たちは時として、自己中心的な思いによって、このことを忘れてしまうことがあります。そのような時に、あなたが与えて下さる「本当の喜び」をもう一度思い出させてくださいように。

この祈り、主イエスキリストの御名によって御前に捧げます。アーメン。

誠の感謝と願い

法学部教授 横田尚昌

フィリピの信徒への手紙 第四章六～七節

6 どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。7 そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによつて守るでしょう。

いろいろな知識を持つようになると、ついつい考えなくてもよいことを考えるようになってしまいます。そして、あれこれ先々のことに思いをめぐらせるのですが、どうなるか判らないことについては、どうも悲観的に考えてしまいがちです。これはおそらく、楽観的に考えると、つい油断し、失敗してしまうので、まずは悲観的に考えて今から対策を練って悪い結果を回避しようと思ふからであります。しかし、世の中にはどんなに一生懸命に努力しても、消極的な結果に

終わることがあります。各種競技の場合、実力が拮抗している選手同士が、ほんのわずかなチャンスをつかめるかどうかで優勝が決まってしまうわけです。各種試験においても、実力的には十分合格圏内にいるのに、ケアレスミスで不合格になってしまうことも稀ではありません。

このように、今一步のところで涙する経験や、これまでの努力が水泡に帰すような無念さを味わう経験は、だれもが持っています。まことに、みじめで孤独な経験です。だから、こんな思いはもう二度としたいくないとおもって再挑戦するときには、失敗から学んだ教訓と知恵を総動員して次に繋げようと精力をつぎ込むわけです。そうすれば、相応のレベルアップが図れて前回よりも良い結果が得られるはずです。それなのに、なぜか前回以上に不安感が募ってくる場合があります。頑張ればがんばるほど、今度も失敗するのではないかという恐怖心が高まってくるのです。なぜかといえば、運に左右されるという領域が依然として克服できていないからです。そのようなとき、人は神仏にお参りして、その成就を願ひ求めることがあります。ある意味、これは自然な流れといってよいかもしれません。

このようにして、世間には幸運を授け願ひを叶えてくださるという神様や仏様を祀る様々な宗教があります。キリスト教も、その一つだとお考えになることと思います。

そこで、今日の聖句に注目して頂きたいのです。フィリピの信徒への手紙四章七節では、「どん

なことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい」とあります。まさに、結果が運に左右されてしまう恐怖心からくる思い煩いはやめて、神にお願いをしなさい、と語っているのです。そして、そうすることに よって神様はきっと私に幸運を授けてくださるだろう、そして成功に導いてくださるに違いない、 と思って次の七節を読みます。しかし、そこには、「そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう」と書かれてあるのみです。 どこにも神様が結果を成就させてくださるとは書かれていません。運を味方につけてくださるな どとは、一言も約束してくださらないのです。

それでは、いったい何が救いなのでしょう。何が有難いのかと訝ってしまいたくなります。しかし、それがキリスト教なのです。

ここで注意しなくてはならないことは、これまで私たちは結果を出すことばかりに着目してきましたという事です。ですから、結果が出なければ意味がない、努力が水泡に帰したと落ち込んでしまう、そういう局面ばかり考えていました。しかし、思い起こさなくてはならないことは、結果が出るまでに費やした労力が本当に無駄になっってしまうのか、という点です。それが本当に無駄になるのは、結果に落胆し、やる気を失い遊んでしまったときでしょう。たとえ、消極的な結

果に終ろうとも、そこに至るまでの過程で様々な方面からの援助を受けながら努力し続けて来られたことを思い起こしてください。そして、そのことに感謝し、その努力を決して無駄にしままいという気概があるならば、将来それが役立つときが来て開花するかもしれない。そうした心と考えとを、主イエス・キリストは守ってください、それが教えなのです。

思えば、これから皆さんは就職活動という大きな難関をくぐらなくてはなりません。大学受験とは桁違いに運に左右されることが多くなります。ここでは、早い時期から色々勉強して努力してきたのに会社から届くのはお祈りメールばかりで、漸く冬の一步手前で内定を獲得する人もいるでしょう。その一方で、何一つ就活対策をとっていなかったのに、面接官と馬が合って一流企業にすんなり早々に合格できる人もいます。でも、どうでしょうか。内定先が早く決まったからといって、そのことが必ずしも人生の安定化に役立つとは思えません。逆に、内定がなかなか得られず苦しい思いをしても、その時の苦勞と経験から人生が豊かなものとなることだってあり得るわけです。

いずれにしても、努力を続けられることに感謝し、つらい経験や失敗から学んだことを生かして何時か恩返ししようと思う人は、決してずる賢くはなりませんし、人を小馬鹿にしたり侮つたりもしません。神様は、そのような直向きな姿勢をじつと見ておられて、一見すると運の悪い

結果に見舞われても、必ずやどこかで、それまでの努力が報いられる機会を用意してください。います。そして、この世での旅路をしっかりと見守っていてくださり、その人にとって最善の生き方となるよう祝福をお与えになる唯一の神様です。聖書に記された御言葉によって、そのことを信じることができます。

讚美歌

工学部教授 星宮 務

サムエル記下 第二十章 一〜七節

1 主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来て、次のように語った。

「二人の男がある町にいた。一人は豊かで、一人は貧しかった。2 豊かな男は非常に多くの羊や牛を持つていた。3 貧しい男は自分で買った一匹の雌の子羊のほかは何一つ持つていなかった。彼はその子羊を養い、子羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて、彼の皿から食べ、彼の腕から飲み、彼のふところでも眠り、彼にとっては娘のようだった。4 ある日、豊かな男に一人の客があった。彼は訪れて来た旅人をもてなすのに自分の羊や牛を惜しみ貧しい男の子羊を取り上げて自分の客に振る舞った。」

5 ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。6 子羊の償いに四倍の価を払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから。」

7 ナタンはダビデに向かって言った。「その男はあなただ。」

詩編 五一篇一九節

19 しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。
打ち砕かれ悔いる心を神よ、あなたは侮られません。

私たちが礼拝の時に歌う讃美歌には、実に多くの世界中で良く知られたメロディーが使われています。

クリスマス・ソングは別として、例えば、158番（あめにはみつかい）、これはどなたもご存じのベートーベンの第9番交響曲「喜びの歌」です。370番（めさめよわがたま）は、スコットランド民謡の“Auld Lang Syne”、我が国の「蛍の光」のメロディーです。

讃美歌の285番（主よみてもて）——これは亡くなった私の母の愛唱歌でしたが——、ウェーバーの歌劇「魔弾の射手」のテーマ曲です。298番（やすかれわがころよ）は、シベリウスが作曲した交響詩「フィンランディア」の主旋律です。

その他にも、コンバース作曲の312番（いつくしみ深きともなるイエスは）は、子供の歌「星の世界」として良く知られておりますし、320番（主よみもとに）は、タイタニック号の沈没

の時に歌われたことで有名です。子供讃美歌としても知られている461番(主われをあいす)は、実は日本語に最初に翻訳された讃美歌二つのうちの一つでございます。

このように、たくさんの美しい讃美歌がございますが、実は私が好きな讃美歌は、それらの有名な歌ではなく、本日歌いました524番なのです。

讃美歌の右下の出典箇所を読みますと、重い病を患っている人たちがイエスに向かって「私たちを憐れんで下さい。私たちを救いに入れてください」と訴えております。私は残念ながら、この箇所からそれほど感動を得ることができませんでした。

英語版の歌詞をあたってみました。「Pass me not, the gentle Savior,」「優しい救い主よ、どうか私を通り過ぎないでください」という歌詞です。「謙虚な叫び」という表現が出てきますが、それ以上印象にのこる言葉を見つめることができませんでした。

それで私は、この讃美歌の日本語の歌詞をもう一度読んでみました。すると、繰り返して出てくる「くだけし心のさけびをば」という言葉がどうしても気になります。

「くだけし心」は、英語では“broken heart”、あるいは“broken spirit”、ということになります。前者ならば、失恋した時の感情のようなもの、後者であるならば、9月の礼拝の時に私が紹介した、3回イエスを「知らない」と言った直後に鶏の声を聞いたペテロのような、打ちひしがれた精神、

と云うことになります。

“broken spirit” と言ふ言葉の出でくる箇所を聖書の中から調べてみました。ちょうど当てはまるのが、今日お読みした箇所です。

このストーリーは、今から3000年も昔、古代イスラエルの王、ダビデが犯した、「バテシバ・スキヤンダル」に基づいており、詳しくはサムエル記下の二一章から二二章に述べられております。ダビデ王はある日、臣下の美しい妻、バテシバを見初めます。彼は、その夫ウリアを戦争の前線に送って死ぬように仕向けました。夫の死後バテシバを自分の宮殿に呼び、わがものとなりました。ナタンという預言者が、ダビデ王の前に現れ、たとえ話をします。それが本日拝読した最初の箇所です。要約します。

ある町に二人の男がいた。一人は豊かで、一人は貧しかった。豊かな男は非常に多くの羊や牛を持っていたが、貧しい男にはたった一匹の雌の小羊しかいなかった。豊かな男に客が来た時、男は自分の羊や牛を殺すのをおしめ、貧しい男のもっていた、たった一匹の小羊を取り上げて、客にふるまつた。

この話を聞いたダビデ王は憤慨して

「こんな事をした、その男は死ぬべきだ」

と言った。

その時、ナタンが告げました。

「あなたが、その人です。」

ダビデ王は、たとえを一瞬のうちに理解し、悔い改めました。

その時に、ダビデ王が神さまへのさんげの気持ちに溢れて歌った詩が、本日拝読した詩編五一篇でございます。一九節に「打ち砕かれた霊」、英語版聖書では受動態の“broken spirit”、「砕かれたる精神」という表現を見つけることができました。

私の大学生・大学院生時代は、大学で科学技術をするこの意味が真に問われた時代でした。

熊本県に発生した有機水銀に起因する水俣病、カドミウム汚染により富山県で生じたイタイイタイ病など、企業の経済論理が優先され、環境破壊により生み出された公害病で人々は悲惨な状況に追い込まれました。

また、東京大学を中心に全国に波及した大学紛争は、本当に「知的な存在」であった大学の中で、人間性を問われるような深刻な問題が起きていたことを浮き彫りにしました。

私の専門にした研究分野では、研究のプライオリティ（誰が最初に成果を出したか）の競争が

激烈で、他の研究室のアイデアを盗むとか、すさまじい現実を眼にしました。私の身近な研究仲間にも、研究はできるのだが、性格の悪い先輩がおりました。

「本当に自分が大学院に進んで研究を続けてよいのだろうか、進学すると、性格が悪い人間になってしまふのではないか」、

自信をなくしました。

そんなとき、私はたまたま仙台の本屋で岩波文庫の解説目録を手にしました。その中に、こんな言葉を見つけたのです。

「岩波文庫という知識の宝の山を前にすると 私は一面非常に

貪欲な気持ちになるとともに 謙虚にもならざるを得ない 大塚 久雄」

「貪欲さと謙虚さ」という2つのことばは、私の悩みを解決してくれるキーワードになりました。貪欲に研究を続けていても、謙虚でありさえすれば、性格の悪い人間になることはないのだ、と。例えば事故調査などの場合、さまざまな論争があつたとしても、事実に基づく検証の前に、真実はやがて明らかになって行くものです。

「事実の前に頭をたれる」謙虚な姿勢、「碎けたる魂」を保つことによつてかろうじて、私どもが行っている科学技術が人間に対立する存在に陥らないで済んでいるのではないか。「碎かれたる

魂」 “broken spirit”、こそが、私どもがたずさわっている「学問研究」と言うものの根底を支えているのではないか。そのように私は信じています。

このような体験を通して、讃美歌524番は私にとって忘れることのできないものになってしまいました。

本日は、讃美歌524番と、詩編51篇を通して、事実に対して謙虚になる、全能者の前に「碎かれたる魂」 “broken spirit” を持つて立つことの大切さを学びました。祈ります。

サレプタのやもめ

工学部准教授 長 島 慎 二

列王記上 十七章一節〜十六節

¹ギレアドの住民である、ティシユベ人エリヤはアハブに言った。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。」

²主の言葉がエリヤに臨んだ。³「ここを去り、東に向かい、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに身を隠せ。⁴その川の水を飲むがよい。わたしは烏に命じて、そこであなたを養わせる。」⁵エリヤは主が言われたように直ちに行動し、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに行き、そこにとどまった。⁶数羽の烏が彼に、朝、パンと肉を、また夕べにも、パンと肉を運んで来た。水はその川から飲んだ。⁷しばらくたって、その川も涸れてしまった。雨がこの地方に降らなかつたからである。

⁸また主の言葉がエリヤに臨んだ。⁹「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わ

たしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」¹⁰ 彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。「彼女が取りに行こう」とすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。¹² 彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」¹³ エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。¹⁴ なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで

壺の粉は尽きることなく

瓶の油はなくならない。」

¹⁵ やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、

幾日も食べ物に事欠かなかった。主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

絶大な力を誇ったソロモン王亡き後、イスラエルの国は、北のイスラエルと南のユダの二つの国に分裂します。今読みました聖書の箇所は、この分裂王国時代の北王国イスラエルの物語です。当時の王は、アハブ王です。父である先代のオムリ王がシュメルから買い取った山に町を築きサマリアと名付けます。その子のアハブ王は、そのサマリアで二十二年間イスラエルを統治しますが、異邦の地であるシドン出身の妻イゼベルの影響で、偶像の神バアルに仕え、サマリアにその神殿を築くなど、聖書の神に敵対する行いをしたのです。

一方、ここに登場する預言者エリヤは、旧約聖書中最大の預言者であり、偶像の神バアルの預言者との戦いで有名です。イスラエルに隣接する異邦の地であるアンモンやアラムとの最前線であるヨルダン川東岸のギレアドのティシュベの住人で、神の目に悪を行ったアハブ王に、干ばつの預言をしたために、アハブ王に追われます。神はそのエリヤにヨルダン川の東にあるケリトの川のほとりに身を隠すように命じます。アハブ王の探索があったとは言え、そこは故郷のギレア

ドですから土地勘もあったのでしよう。とはいえ、身を隠しているわけですし、そもそも神の言葉にあるように干ばつが起こったのですから食料を得る当てのあろうはずはありません。いわば、命を保つ手立てのないところであつたわけですが、神は、カラスによつてあなたを養わせるとエリヤに告げたのです。この世の判断では、何の保証もないところに、しかし、エリヤは神の言葉の故に直ちにケリトの川のほとりに向かつたのです。

神の言葉、それは、ひとりひとりが信仰の上で聴いていくものです。聖書に立つていく人生は、ときには、周囲の嘲笑にさらされ、この世の損得とは異なる世界に生きるということなのです。しかし、また逆に、神の言葉に従つていくときに、エリヤのように、カラスが肉やパンを運んでくるといった体験をしていくものだとと言えるのです。

ところが、いよいよ、川の水も涸れてしまうと、神は、それこそ異邦の地サレプタに行くように命じます。今度は、ひとりのやもめにエリヤを養わせるといふのです。貧しいに違いない、しかも異邦人であるやもめに身を委ねよと命じたのです。はたして、エリヤがそのやもめに会つたとき、やもめは薪を拾っているところでした。そのやもめには、一握りの小麦粉とわずかな油があるだけで、薪を拾つて帰り、食べ物を作つて食べてしまえば、息子とただ死を待つのみという状態でした。そのやもめに、エリヤは、まず、自分のためにパン菓子を作るように命じるので

す。異邦人であつたサレプタのやもめとエリヤとの信仰の応答が、ここでなされたのです。聖書は、エリヤの言葉に従つたやもめの家の壺の粉と瓶の油は尽きることがなかったと教えています。

わたしたちの周囲には、この世の損得に敏感な人がいます。しかし、わたしたちは、見かけの損得ではなく、永遠に尽きることなくあふれ出るものに目を留めていくべきです。イエス・キリストは、『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。』（マタイによる福音書四章四節）と語られ、また、「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」（ヨハネによる福音書六章三十五節）とおっしゃいました。パンが大事でないというわけではありません。第一に、神の言葉に従っていくということです。

神は生きています。その神によつて東北学院大学が建てられているのです。とすれば、東北学院大学が学生に伝えてきたものは、決して、社会でうまく立ち回り、あるいはお金を儲けるノウハウではないのです。もとより、社会的な地位も、お金も、それ自体がいけないのではないのです。その前に大切なことがあることを伝えてきたのです。すなわち、キリストの言葉にあるように、「世の光、地の塩」となることを伝えてきたのです。そして、それは、ひとりひとりがエリヤのように、サレプタのやもめのように信仰のうちに神様に心を開いていくことによつて実現されるのです。

ある日の音楽礼拝

大学オルガニスト
今井 奈緒子

七月二〇日（水）泉礼拝堂 司会：野村 信宗教部長

〔讚美歌〕 301番

〔聖書箇所〕 ヨエル書第三章 1～2節

〔演奏曲目〕 N. de グリニー（1672-1703）組曲「来たれ、創造主なる聖霊よ」より「来たれ、創造主」
をテノールで／5声のフーガ（前奏）

M. デュリュフレ（1902-86）コラール変奏「来たれ、創造主なる聖霊よ」（全5曲）（演奏）
N. de グリニー組曲「来たれ、創造主なる聖霊よ」より グラン・ジユの対話（後奏）

全世界のキリスト教会では、今年は五月一五日の日曜日に、ペンテコステ（聖霊降臨）野出来事を記念し祝いました。この世に「教会」が誕生した日だからです。聖書はこの出来事を、聖霊

がはと（鳩）のように「くだり、火のようなものが分かれて弟子達の上に留まった…と伝えています。ペンテコステから半年あまりの間、教会の暦は「聖霊降臨節」と呼ばれる期間を刻んでいます。

今日演奏する曲はいずれも、「聖霊よ来たれ！そして私たちの心を燃え立たせてくださいアレルヤ！」と歌う賛歌をもとに作られたオルガン作品です。

前奏と後奏では、フランス・シャンパーニュ地方の中心地、ランスの大聖堂オルガニストであったニコラ・ド・グリニの編曲で、そこにはフランス古典の典型的な音色を聴くことができます。

今年没後三十年を迎えたモーリス・デュリュフレの編曲は、フランスの近代和声を駆使したもので、コラールの提示に続き4種類の短い変奏が、さまざまな音色の組み合わせで演奏されます。ここ泉キャンパス礼拝堂のオルガンは、フランスの古典から近代の作品を弾くのに最適な音色を備えていますので、両作曲家の作品により、その独特な響きを味わってください。

七月二七日（水）多賀城礼拝堂 司会・鐸木 道剛総合人文学科教授

「讚美歌」284番第一、二節 讚美歌21 141番「主よ、我が助けよ」第一、五節

〔聖書箇所〕 詩編九〇篇 1〜2節、9〜12節

〔演奏曲目〕 J. S. バッハ (1685-1750) クラヴィーア練習曲集第三部より「これぞ聖なる十戒」

BWV678 (前奏)

J. S. バッハ フーガ変ホ長調 BWV552/2より (後奏)

〔讃美歌を歌う〕 讃美歌 111番 第一節「神の御子は」

讃美歌 21 575番「球根の中には」(プリント参照)

今日の音楽礼拝では、新旧の讃美歌に親しんでみましょう。最初に歌う284番は、クリスマスに聖歌隊や会衆によって必ず歌われる111番と、全く相違ないメロディを持っています。原曲はラテン語で“ADESTE FIDELIS”と呼ばれ、一八世紀の初め頃からカトリック教徒のあいだで歌われていました。その後英米のプロテスタント各派の讃美歌集に収められ、日本でもよく知られるようになりました。今度は、元祖クリスマススの歌詞で、一節だけを歌いましょう。

『讃美歌21』は1997年に、日本キリスト教団讃美歌委員会から出版されました。その中から「球根の中には」を歌ってみましょう。アメリカの音楽家ナタリー・スリース (1930-92) が作詞作曲したこの讃美歌は、フォークソングのような親しみやすさ、歌い易さでありながら、三節の

はじめにある「いのちの終わり」、いのちの始め」をキーワードとして、心に響いてきます。

最後の讃美歌の旋律は、作曲者のウィリアム・クロフト（1678-1727）が最初にオルガニストを務めたロンドンの教会名に由来して、STANNEと呼ばれています。バッハもこの旋律を好み、フーガの主題として用いました。後奏はその「聖アンナのフーガ」です。

一二月一九日（月）土樋キャンパスラーハウザー記念礼拝堂 司会：野村信宗教部長

〔賛美歌〕 114番、540番

〔聖書箇所〕 エフェソの信徒への手紙第二章 1〜10節

〔演奏曲目〕 F. Ⅱ A. ギルマン（1837-1911）2つのノエルによるオッフエルトワール（前奏）

M. レーガー（1873-1916）《Weihnachten クリスマス》（演奏）

G. フリュージェル（1812-1900）「高く戸を上げよ」（後奏）

前奏はフランス一九世紀の作曲家でオルガニスト、ギルマンの作品です。当時カヴァイエッコルという名工が、さまざまな楽器の音色を模倣し一台でオーケストラの様に機能するオルガンを

製作していました。ギルマンはそれらの楽器を駆使し、この作品のように人々に親しまれている旋律を元にした編曲によって、人気を得ました。

今年が没後百年のマックス・レーガーは、ドイツ後期ロマン派の作曲家で、その創作の中心はキリスト教信仰に基づくオルガン作品でした。この世の闇に、私たちひとりひとりの心の中に、待ち焦がれた神の御子の誕生をお祝いするクリスマス・レーガーの《クリスマス》はこの「暗闇」を延々と表現し、終わりにはコラル「天の彼方から」と「きよしこのよる」のメロディが静かにパラフレーズされます。

後奏は一七世紀のアドヴェントのためのドイツ讃美歌「高く戸を上げよ」（讃美歌21233）によるオルガン作品です。

一二月二二日（水）泉礼拝堂 司会：出村みや子 総合人文学科長

〔讃美歌〕 102番、544番

〔聖書箇所〕 ヨハネによる福音書第一章1〜5節

〔演奏曲目〕 F. = A. ギルマン（1837-1911）2つのノエルによるオッフエルトワール（前奏）

C. B. バルバーストル (1727-99) ノエル「陽気な羊飼ひ達はどっへ」(演奏)

J. S. バッハ (1685-1750) 「甘き喜びの歌」 BWV729 (後奏)

前奏はフランス19世紀の作曲家でオルガニスト、ギルマンの作品です。当時カヴァイエールという名工が、さまざまな楽器の音色を模倣し一台でオーケストラの様に機能するオルガンを製作していました。ギルマンはそれらの楽器を駆使し、この作品のように人々に親しまれている旋律を元にした編曲によって、人気を得ました。

ノエルとはフランス語でクリスマスのこと。「ノエル」と呼びかければそれは「クリスマスおめでとう!」を意味します。またノエルは、古くから歌い継がれてきたクリスマス民謡のこともあり、フランスのオルガニスト達は多くのノエルをオルガン曲に編曲して、ミサに集まってきた人々を喜ばせました。あまりに人気が出てしまい、バルバーストルには教会からノエル編曲禁止令が出たほどでした。泉礼拝堂の個性的なリード管の音色を楽しんでください。

後奏は、礼拝の最初に歌った讚美歌102番のメロディ(コラル旋律)に、バッハが当時としては大胆な和声付と華麗なパッセージを施した編曲です。

人生を変える秘訣

教養学部准教授 大澤 史 伸

コヘレトの言葉 十一章一節

「あなたのパンを水みずに浮うかべて流ながすがよい。

月日つきひがたつてから、それを見みだすだろう。

みなさんは、こんにちは、私は大澤史伸と言います。現在、教養学部地域構想学科の教員をしています。大学では、「社会福祉概論」や「福祉サービズ論」などを教えています。どうぞよろしくお願いします。

私はお笑いが好きで、よく吉本のライブを見るために東京や大阪まで行きます。私のお気に入りのお笑い芸人は、「トレンディエンジェル」です。みなさんは知っているでしょうか？特に、斉

藤さんが気に入っています。斎藤司は、一九七九年、神奈川県横浜市出身の現在、三十七歳です。日本大学商学部を卒業後、楽天に入社。主に広告主獲得をメインとした法人担当営業として六本木ヒルズでエリート社員として働いていました。

しかし、二〇〇四年二十五歳で芸人を目指し、NSC東京校第一〇期生として入学をします。そして、そこで現在の相方の「たかし」とコンビを組み、トレンディエンジェルを結成しました。二〇一五年M-1グランプリ優勝を果たします。敗者復活枠からの優勝はサンドウィッチマン以来史上二回目であり、ノースードからの優勝は初めて、という快挙を成し遂げます。

斎藤さんの人生は、楽天のエリート社員という安定的な地位を捨て、不安定な芸能界で芸人を目指すというある意味で自分の人生に挑戦をした訳です。M-1の優勝も順調であったわけではなく、二〇〇四年から挑戦を重ね、十一年目でやっと優勝をして、自分の夢を実現するのです。

今日の聖書の言葉も人生に勝利をするための秘訣があります。共に聖書の言葉を学んでいきましよう。

私たちが人生に勝利するためにしなくてはならないことは、

①しんどい時にこそ勝負をすること

十一章一節では、はじめに「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。」とあります。これはど

ういう意味でしょうか？実は、これは航海する人たちの生活からたとえをとっています。航海する人、つまり、船で遠くに旅立つ人たちに対するアドバイスです。

昔のことですから、船旅は何日かかるか、あるいは、何か月かかるか分かりません。当然のことながら、遠くに旅立つわけですから船には食料であるパンが積んであるわけです。でも、その食料となる大切なパンを水の上に投げなさいと言っているのです。

みなさんが今、読んでいる聖書を旧約聖書と言いますが、旧約聖書では「水」は不安定、不確定、恐怖、危険、患難などを意味します。つまり、聖書は、ここであなたの人生の中で不安定、不確定、恐怖、患難などが襲ってきたときにこそ、勝負をしなさいと言っているのです。

ある人は言うでしょう。そんなことをしても意味がない、あるいは、何もしない方がいい、悪あがきだ、と。でも、何もしないことは何も生み出すことがないのです。みんなが何もしないようなしんどの時にこそ全力を尽くして勝負をすること、しんどの時にこそ勝負をする時にこそあなたの人生は変わるのです。

② 忍耐を持ってじっくりと待つこと

次に、「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたつてから」とあります。一番目のポ

イントで「しんどい時にこそ勝負をすること」を言いましたが、次に、「月日がたつてから」という言葉から分かることは、結果が出るには時間がかかるということが分かります。

みなさんは、どうでしょうか？すぐに結果を求める人、あるいは、良い結果が出ないとすぐにあきらめてしまう人ではないでしょうか？もっとうなれば、自分の夢を実現するためには、一回か二回の失敗であきらめないということも言えます。なぜなら、良い結果が出るには時間がかかるからです。

芸能界でも「一発屋芸人」とか「一発屋アイドル」「一発屋タレント」などと言われる人がいます。すぐに人気が出る人はすぐに人気も落ちてしまうことが分かります。でも、じっくりとライブ活動をした歌手や、地道な舞台活動してきた人は一度メジャーになると人気が落ちることはありません。長く活動を続けることができます。なぜなら良い結果を出すためにはそれだけ時間がかかるからです。

聖書は安易な成功を私たちに勧めません。聖書のいう成功とは決してしばむことのない永遠に続く成功を私たちに与えようとしているのです。忍耐を持ってじっくりと待つことが大切なのです。

③必ず良き結果として戻ってくることを

三番目のポイントを見てみたいと思います。「あなたのパンを水に浮かべて流すが良い。月日がたつてから、それを見だすだろう」とあります。「それを見出すだろう」それとは、何ですか？そうです。あなたが「水に浮かべて流したパンです。」聖書はここで、「水に浮かべて流したパンは戻ってこない」とか、あるいは、「水に浮かべて流したパンはポロポロになって戻ってくる」とは言っていないことに注目して下さい。

あなたが水に浮かべて流したパンは流した時と同じように、いや、流した時以上の良きパンとなつて戻ってくるのです。つまり、あなたがしんどい時に勝負としたその結果はどんなに長い時間がかかったとしても必ずあなたの元に戻ってくるのです。あなたが自分にとって大切なパン、それは、あなたの時間かも知れませんが、あなたの能力、あるいは、あなたのお金、あなたにとつても大切なもの、いや、あなたの全力を尽くして一生懸命に行つたことは必ず良きものとなつてあなたの人生に戻ってくるのです。

最後に、こんな話をして終わりたいと思います。

「世界のヤマザキ」として知られる山崎製パンの創業者の飯島藤十郎氏は、現在の東京学芸大学を卒業し、都内の小中学校で教員をしていましたが、ある時からパン屋を始めるようになります。

ある日のこと、主力工場の武蔵野工場が全焼するという大事件が起きました。この時、飯島

氏は、『この火災は、あまりにも事業本位で仕事を進めてきたことに対する神の戒めだ、これからは神の御心にかなう会社に生まれ変わります』と祈りを捧げました。

この時から「山崎製パン」は、生まれ変わったのです。現在、資本金百十億、売上高約8000億円、従業員数1万7千人の日本を代表する一大企業に成長をしています。飯島氏は、聖書の言葉に感動を受け、洗礼を受けてクリスチャンになりました。彼は、今日の聖書の言葉のように、①しんどい時にこそ勝負をし、②忍耐を持ってじっくりと待ち、③良き結果が必ず戻ってくることを信じながら山崎製パンの会社経営を行ったのです。

私たちも、たった一度の自分の人生に勝利するために、①しんどい時にこそ勝負をし、②忍耐を持ってじっくりと待つことを覚え、③良き結果が必ず戻ってくることを信じながら、自分の人生を歩んでいくことはありませんか。

一粒の麦として生きた青年

東北学院史資料センター 日野 哲

ヨハネによる福音書 第二二章二四～二五節

24 はつきり言いっておく。一粒ひとつぶの麦むぎは、地ちに落ちおて死しななければ、一粒ひとつぶのままである。だが、死しねば、多くおほの実みを結むすぶ。25 自分じぶんの命いのちを愛あいする者ものは、それを失うしなうが、この世よで自分じぶんの命いのちを憎にくむ人は、それを保たもつて永遠えいえんの命いのちに至いたる。

東北学院は、今年創立一三〇周年を迎えました。創立記念日は五月十五日ですが、今年は日曜日だったため、前日の五月十四日（土）に、土樋キャンパスの礼拝堂で記念式が行われました。そしてその後、市内の北山にあるキリスト教共同墓地で校祖墓前礼拝が行われました。このキリスト教共同墓地には、東北学院の創立者である押川、ホーイ、シュネーダーの三校祖をはじめ、一三〇年の歴史の中で様々な形で東北学院の発展に貢献されたたくさんの方々のお墓や記念碑が

あります。私自身も中高から大学まで東北学院で学びましたので、思い出深い恩師の方々のお墓もたくさんあります。このような墓に囲まれながら礼拝を捧げると、特別な思いに満たされますが、私は、この時、遠くアメリカ東海岸の墓地に建てられている小さな青年の墓に思いを馳せていました。

この青年は、「金子謹三」という方です。金子青年は、東北学院の卒業生でもなければ、教員でも職員でもありません。仙台に來たこともないようなこの青年が、実は創立後間もない明治期の東北学院の発展に大きな貢献をしたのです。

一体、金子とはどんな人物だったのでしょうか。記録によれば、金子は岩手県花巻の出身で、一八六五年の生まれですから、明治維新の三年前に誕生しています。十七歳の時に慶應義塾に入り、二年後には志を立ててアメリカに渡り、やがて現在は本学の協定校になっているフランクリン・アンド・マリーシャル大学に入學します。その翌年一八八五（明治十八）年、金子は二十歳でクリスチャンとなりますが、その決心に大きな影響を与えた人物が、七歳年上で、その時はランカスター神学校の最上級生であったホーイ（三校祖の一人）でした。ホーイは、既に日本伝道を志しており、この若い日本人青年の金子に特別な関心を持ったとしても不思議ではありません。ホーイは英語で聖書の講義を行い、語学を教えながら、金子を信仰の世界に導いたのです。いわば、金子はホー

イが信仰に導いた最初の日本人と言えるかもしれません。

金子が洗礼を受けた一八八五年（明治十八年）は、東北学院創立の前の年で、ホーイはその十二月に日本に向けて旅立つこととなります。ホーイは、出発するにあたり、金子青年を伴って、やがて東北学院のもう一人の創立者となるシュネーダーを訪問しました。ホーイより二年先に神学校を卒業していたシュネーダーも日本伝道を志していましたが、この時は教会の牧師をしていました。ホーイとシュネーダーは、日本での再会を約束して別れますが、この金子青年こそ、シュネーダーが最初に出会った日本人となったのです。

金子は、大学卒業後、ホーイやシュネーダーと同じランカスター神学校に進み、牧師の資格も取得しました。当時の日本人としては、最も早く、最も長く（約十年）、正規のアメリカ式教育を受けた一人に違いありません。東北学院は、この金子を神学部へのブル語と旧約聖書の教授として招くことに決定しました。ホーイやシュネーダーの推薦があつたと思われませんが、金子はこの特別な任務のためにもう一年神学校で勉強したいと申し出て、勉学に励みました。しかし、この最後の一年の間に彼の健康は衰えはじめ、肺の病気が急速に進行し、不幸にも帰国を直前にして、二十九歳でランカスターで亡くなりました。一八九五年（明治二八年）五月十五日（現在の東北学院の創立記念日）の早朝、東北学院が仙台神学校から東北学院と名称を変更してわずか四年後

の出来事でした。

さて、それではこの金子青年がどのような貢献を東北学院にもたらしたか、ということですが、彼は在学中、周りの人たちに大きな影響を与えていたようです。彼が亡くなったことを報じた当時の教会の新聞には次のように書かれています。

「金子青年は、その礼儀正しく男らしい態度と気品のある性格、そして何より、その謙虚なキリスト教的生き方の故に、大学および神学校時代の教授や同輩らの敬愛の念を集め」ていた。（『メツセンジャー』より）

異郷の地での金子の英雄的な死は、アメリカの教会全体に大きな感動を巻き起こし、金子の名前を付けた記念の基金「金子基金」の募金が始まりました。最終的な募金額は、当時東北学院や東北の諸教会のためにアメリカの教会の本部から送金されていた年額に匹敵する二万五千ドルもの巨額に達し、やがて東北学院のために捧げられたのです。

東北学院には、当時「労働会」という組織があり、押川やシュネーダーなどの創立者の名声を慕って全国から集まった青年たちに、働きながら学ぶ機会を与えていました。その働きは牛乳や新聞の配達、ぶどうやイチゴの栽培、キリスト教書籍や文房具などの販売、そして当時仙台では最新式を誇っていた英文の印刷もできる印刷所の運営など、多種多様でした。働く学生たちの数も、

当時の在学生数約150名の半数以上にも達し、彼らの泊まる宿舎の建設やそのための土地の取得も必要でした。金子基金は、当初はこの労働会のために用いられ、印刷所は金子の名前を付けて「金子記念印刷所」と呼ばれ、東京より北では最も優れた印刷所として、多くのキリスト教伝道文書が印刷・発行され、東北各地や全国に配付されました。

また、金子基金は現在の土樋キャンパスの校地の取得や、以前市内の東二番丁にあった中学校・高等学校の校地の取得などにも用いられ、東北学院の発展に大きな貢献をすることになったのです。

さて、今日の聖書の箇所には、イエス・キリストが言われた言葉として次のように記されています。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」これは、キリストご自身について言われた言葉なのですが、今ご紹介した金子青年が生き、そして志半ばで死んだことの意味を考える上でも、大切な言葉であると思います。

アメリカ東海岸のランカスター墓地にある金子謹三の墓石には、名前と生まれた日、亡くなった日のほかに、英語でただ一行、「Faithful unto Death」（死に至るまで忠信）と刻まれています。

異国の地で一粒の麦として生き、死んで多くの実を残した金子青年を、今日は思い起こしながら

ら礼拝を捧げることができ、感謝でした。

それでは、お祈りをいたします。

「イエス・キリストの父なる神様、あなたのなさることは、私たちの願いや思いをはるかに超えていて、とうていはかり知ることができません。しかし、あなたは私たちが生きることの意味を与え、私たちを絶えず支えてくださるお方であることに感謝いたします。

どうか私たちが生きる意味を見失い、希望を失いかけるような時も、あなたが私たちを生かしてくださるお方であることに信頼し、あなたに生かされている者として、生きることができまますよう導いてください。

この祈りを私たちの希望の源であられる主イエス・キリストのみ名をとおしてお祈りいたします。アーメン」

編集後記

大学宗教主任 吉田新

「大学礼拝説教集」を皆さまにお届けできますことを感謝いたします。二〇一六年は、東北学院（私塾 仙台神学校）が仙台の地に開設されてから一三〇年という記念すべき年です。また、今年度から三名の新しい大学宗教主任が加わり、本学の宗教活動もいっそう盛んになりました。今年も近隣の先生方に説教のご奉仕をいただき、大学礼拝を守ることができました。礼拝にご協力いただきました先生方に心から感謝を申し上げます。

今年も、私たちにとってうれしい発見もありました。私たちが毎日、礼拝を捧げているラーハウザー記念東北学院礼拝堂の正面に設置された「キリスト昇天」のステンドグラスが、わが国に現存する唯一のヴィクトリア朝の重要工房、ヒートン・バトラー＆バインの作であることが判明しました。さらに、文部科学省が実施する「私立大学研究ブランディング事業」に採択され、このステンドグラスの本格的な研究が始められました。これにより、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂、ひいては学院の宗教活動にさらなる注目が集まります。わたしたちがこのような歴史的価

値の高い建造物のなかで礼拝を守れることは、大きな恵みであると強く思います。

このステンドグラスの下に、聖書のみ言葉が英語で記されています。ルカ福音書二四章五一節「イエスは」祝福しながら彼らから離れ、天に上げられた」という言葉です。

このキリストの昇天の記述は、ルカ福音書の終結部分と、その続編である使徒言行録の冒頭に記されています。イエスが地上での働きの後、天に挙げられ、イエスの下には弟子たちがおります。弟子たちの視線の先、ステンドグラスの中央にはエルサレムの町が見えます。イエスの足元には白い服を着た二人の若者が控えています。イエスは弟子たちに「地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と述べています（使徒言行録一章八節）。

なぜ、東北学院の礼拝堂に天に昇ろうとするイエスのステンドグラスが備えられたのか、正確な答えは分かりません。今後の調査でその答えを得るかもしれませんが、私なりに想像したいと思います。学院での毎日の礼拝で、ここで学ぶ学生、そして教職員にイエスの先ほどの言葉を伝えようとしたのではないのでしょうか。ここに集う一人一人は、イエスのことを知り、それを証する証人であると伝えられたのではないのでしょうか。東北学院のスクールモットーの一つは、イエスの教えをまとめた言葉である、「LIFE, LIGHT AND LOVE FOR THE WORLD」です。世界のための命となり、光となり、愛となる。

私たちは、東北学院が目指す生き方を証する証人です。周りの人々の命として輝き、周囲がたとえ、暗く闇に包まれたとしても、私たちは周りを明るく照らす光となり、人々を励まし、慰める愛として生きることを生涯を通して証するのです。

私たちは命であり、光であり、愛です。礼拝堂に集う一人一人が、このことをこれからも証し続けていきたいと思えます。

大学礼拝説教集

第 二十一 号

二〇一七年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 野村 信

編集責任者 大学宗教主任 吉田 新

出版社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学 総務課

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎〇二二・二六四・六四二八

